

部屋見舞の客は、嫁に對して見舞に来るのですから、どうしても女客が多いので、従つて各身分に應じて馳走を見計ひ饗應するやうにします。本式では最初に箸初めの臺を出し、次に吸物を出し、漸次に肴を出し、盃を薦め、續いて料理を薦めるのであります。また祝儀のために来る客を表座敷の客と云ひ、部屋見舞の客には部屋へ通して馳走をすることもあります。また祝儀のために使を寄越したならば、これに對して禮狀を書かねばなりません。

里 歸 り

結婚式が済みますと、婦が里歸りをします。昔から三日歸り、五日歸りと云ひまして、式の日より三日目か五日目に親里へ行くのであります。これを花歸りとも云ひます。この里歸りには男の媒酌人が附いて行くのが普通であります。この時嫁は婿から里の者へ土産物を持つて參ります。この土産は兄弟は勿論、召使の者へも持つて行き

ます。その土産には總て二本水引をかけます。

里歸りをした場合の御馳走は矢張り鄭重にしますと口取と吸物、御飯と刺身は除けることの出来ないものであります。そして挨拶廻りは近所との交際の程度にも依りまされども、向ふ三軒兩隣といふものに挨拶に廻らねばなりません。また里歸りの翌日には、婿方の縁者より人を遣はして嫁の安否を尋ねさせます。これを里見舞と云ひます。この里見舞には成るべく同品を贈らぬやうに、各家とも互に聞合せて、異なる物を贈るやうにいたします。また婿の家からは饅頭を贈る慣例がありますが、これは里方に於てそれ／＼親戚や知友の許へ分配するのであります。

近頃は結婚披露の宴をしますと直ぐ、その後で新婚旅行に出掛ける者が多いやうです。その時には旅行から歸つて、吉日を選び里歸りをするやうにします。

里 開 き

里開きといふのは、里から婿の宅へ戻るものであつて、三日歸りならば其れより三日目、即ち式の日より六日目に、五日歸りなれば其の日より五日目、即ち式の日より十日目の夜に里開きをするのであります。これは里歸りの時と同じく、それ／＼分に應じて土産など持つてまわりますが、別段に式などありません。

婿入りの式

婿入りの式は、本當は嫁が輿入をする前、即ち結納の式が済めば、次に婿入りをするの古來の法であります。當今は婚禮後大概是里歸りと里開きの間の日に、双方都合のよい日に行ふことになつて居ります。そして往くときには舅から贈つた衣服を着て往くのが法であります。また土産物は嫁が持つて來たものに相當したものになります。

床の飾り附は式三献の盃のときと同じく饗膳、二重臺、手掛、瓶子、熨斗、置鳥

置鯉、銚子、提子、三つ土器等を飾り、燭臺もまた同様です。着座の次第は婿は客位に、舅姑は主位に坐り、第一番に熨斗を出し、引渡しを据ゑ、手掛、三つ盃を出し、酌人も二人出で、加へをすること式三献のときと同じであります。舅が三献飲んで婿へさします。婿が二献飲むときに、舅より婿への引出物を出します。婿が一献加へて飲み、舅へさしますと、舅は三献飲んで第一の盃を納めます。このとき打躬を出すか、略すれば雑煮を出すのであります。第二の盃は姑が三献飲んで婿へさせば婿は三献飲んで姑へさします。姑は三献飲んで二の盃を納めます。こゝで腸煎を出すか、略して吸物を出します。第三の盃は婿が三献飲んで舅へ献し、舅は三献飲んでその盃を納め、引渡し、打躬、腸煎の膳を撤き、本膳を出すのであります。尙ほ土産物の禮は、舅が婿と對面したときに、祝辭を述べ、次に禮を言ひ、下々一同へ受けた禮も、このときお互に言ふのであります。舅より婿への引出物としては小袖、卷衣などを臺に載せるか、廣蓋または盆に載せて遣はしたものであります。

門見せの禮

婿入りも里歸りも滞りなく済めば、嫁は祝儀の品を受けた親戚知友の家へ一々禮に廻るもので、これを門見せと云ひ、姑が嫁を伴つて行くか、或は親族の妻女が同道するか、いづれでも宜いのですが、行く先々へ進物を持つて行きます。この進物の品は里方で持つのもあれば、婿方で引受けるものもあります。そして當日の婿は重ね草履を穿くものであります。

これで結婚式の大略を盡しましたが、この結婚の式はどこまでも嚴肅に、意義あるやうにしたいものであります。

新婚旅行に就て

結婚式を挙げた新郎新婦が、所謂ホームエームの途につき、式後直ぐ旅行に出掛け

るのは歐米に於ける習慣で、近來我が國でも式後披露の宴を終るや否や、これを學んで新婚旅行の途に上るものが決して少くありません。

然し、歐米にも近來は新婚旅行の是非を論ずる聲が漸く喧ましくなつて來て、これを非難する者も相當にあります。況んや古來斯る習慣のなかつた我が國に於て、これを非難する者の多いのは當然であります。

非難の理由は、歐米に於ても將亦我が國に於ても共に同じで、新婚早々の間は、新婦にしても新郎にしても、共に互に珍らしいから、兎角何かにつけて充奮し易い。然るに拘らず、男女二人で水入らずの旅行を續けては、神経を充奮せしむる事が度重なり、その結果、神経衰弱を起すに至る恐れあるのみならず、他方に於ては又房事過度にも陥り易く、健康を害する危険が多いといふにあります。

これは一應尤も至極の申分に相違ありませんが、一方に於て新婚旅行の齎す利益を考察すれば、これぐらゐの理由で新婚旅行を非難し、これを排斥するには及ばぬので

あります。

夫婦に於て最も必要とするものは、意志の疏通と互に馴れ合ふ事であります。この二つが完全に進行せざるに於ては、夫婦にして夫婦にあらずで、惹ては破鏡の歎を生ずるに至らぬとも限りませぬ。然るに結婚式後直に家庭の人となつてしまつては、そこには他人の出入もあり、少し裕福な家柄にでもなりますと、下女や下男などもあることですから、それ等の手前に對して遠慮氣兼ねをする必要に迫られ、それが假令意志の疏通を圖る爲めなるにもせよ、恰も傍ら人無きが如くに、新郎新婦が額を寄せ合せたり、頬をすれ／＼にしたりして喋々喃々と語り合ふ譯にはゆきません。況んや馴れ合つてする行爲などは斷然之を差控へねばならぬのであります。

殊に日本の家庭組織の如く、親兄弟と同居せねばならぬ事情があつたり、又家屋の構造が開け放しになつて開放せられ勝なるに於ては、假令夜中に家人が皆寢静まつてしまつてからの後でも、四方八方に氣兼ねねばならぬのであります。その心理状態の

害資たるや、新婚旅行によつて神経を亢奮せしむる以上の悲惨事を將來することになります。

然し旅行の途に就けば、旅の恥は掻き捨てなどといふ心理状態も多少は手傳ひ、また旅館やこれに使役せられる女中下男なども、新婚の夫婦と見て取ればその意りで應對し、室なども離座敷や何かを與へてくれますから、新郎新婦は殊に遠慮する必要もなく、また氣兼ねするにも及ばずして、思ふ存分互に馴れ合ひ、遺憾なく意志の疏通を圖り、高い聲を發して語り合ふことも出來、こゝに所謂二世を契る夫婦永久的の關係を確立する基礎を築き得られるのであります。殊に日本に於ける現状の如く、結婚が戀愛即ち結婚前に於ける相思や交際を前提とせず、單に見合だけを前提するに於ては、式後直に新婚旅行の途に就くことが、一層著大なる効果を新郎新婦の上に齎し、夫婦關係を戀愛結婚に於けると同一、否それ以上に膠の如く密なるものたらしむるに至るのであります。

新婚旅行は房事過多の誘因となり、時に新婦の身體を負傷せしむるに至る惧れすらありとなすが如きは、一を知つて二を知らざるもので、如何に新婚旅行の途に就かず結婚式後直に家に入り、家庭の人となつた新郎新婦でも、不所存の男女ならば、矢張り房事過度に陥り、その新婦の身體に受くる危害の如きも、それだけ多いと云はねばなりませぬ。こんな點は、外部より岡焼を敢てするまでもなく、如何に新婚旅行の途上であるからとて、新婚夫婦は自發的に適度の抑制を試むるに至るのが、これ自然の天則ゆえ、決して杞憂するの要はないのであります。

加之、家庭には家庭に必要な事務があります。如何に新婚早々の新郎新婦でも、一旦家に入つて家庭の人となつてしまへば、これに煩はされて追ひ廻され、旅行中に於ける如く、上げ膳下げ膳で其日を送り得らるゝものでありません。それが又、新郎新婦のゆつくり馴れ合つて意志を疏通する機會を奪ふことになります。その内新婦が受胎でもして分娩するに至れば、嬰兒の哺育は固より言ふまでもなく、長ずるに及ん

では家庭を擧げて之が教育に意を注がねばならなくなり、新郎新婦もお父さんお母さんたるべく餘儀なくさるゝので、夫婦關係の如きは二次のものにせられ、如何に夫婦の間では共に一緒に揃つて散歩や買物にさへ出掛けられなくなつてしまふのであります。

故に新婚當時の如き樂しきは、新婚當時を措いて如何なる男女にも二度と再び來るものでないと云ひ得られます。況んや小供が出來てしまへば、生活苦に逐ひ廻され、日夜これが爲めに苦勞せねばならぬものに於てをやであります。新婚の樂しみなるものは、式後僅かに一二月、精々長くて一年半とは續きませぬ。従つて結婚早々のうちに思ひきり新郎新婦に於て愉快に其日を送る工夫を重ね、面白く遊んでしまはねば如何に將來を期して居つても、老後には孫の世話までみねばならぬのですから、到底も夫婦相携へて面白く暮す機會は又と來ぬのであります。

蜜月の新婚旅行は、一生に再び味ふことも出來ぬ夫婦としての樂しみを味ふ唯一の

機會です。この意味に於て少しでも財力に餘裕のある男女は、結婚式後直に新婚旅行に上るべきを勧めるのであります。

房事の回数に就ては、いづれの新郎新婦も式後直に懐く疑問であるのみならず、これに關する種々の傳説や諺なぞ小耳に挿んでゐるのが却つて害をなし、或は健康を傷けたり、或は神經衰弱を來したり、夫婦間の和合を損じたりするに至る危険無しとせずであります。

一般に行はるゝ説は、廣く今日では人口にも膾炙せらるゝに至つてゐる宗教改革の英僧マルチンルーテルにより定められた戒律で、一週に三回と云ふにあるのですが、これはルーテルが自己の健康状態から割出したもので、別に何等の據るべきところもないのであります。文明が進歩し、飲食物や住居や服装や暖房装置などが變つて來てゐる今日に於ては、假令その人の健康状態がルーテルと同様であるとしても、ルーテルの定めた戒律を以て律する譯にはゆくものではありません。況んや人に依つて

各その健康状態を異にし、殊にルーテルの如き肉食人種とは全くその食物から住居衣服及び暖房装置まで全く異なる日本人種には、ルーテルの定めた戒律を當て簞めんとする如きは、當を得ざるの甚しきものであると云はねばなりません。

婚禮に用ひる生花の善惡

婚禮の席に生けるべき花は、松竹梅に限らず、目出度い花であれば何でも良いのであります。昔から花に好き嫌ひをつけて、縁起をかつぐ人は随分氣にするものであります。今一般に用ひられる花は、すべて實を結ぶ花を好んでゐるやうであります。即ち松、竹、梅、椿、菊、萬年青、猫楊、小菊、櫻、李、林檎、花欄、橘などで、色直しの座敷へは櫻とか桃、牡丹、菊のやうな成るべく陽氣な花を充分派手に生けます。また一般に忌まれてゐる花は、色の褪め易い花とか、垂れ物や弱いものを避け、名の悪いものも忌まれてをります。即ち百日紅、猿猴杉、楓、玉蘭、彼岸櫻、佛手柑

桂、紫陽花、罌粟、棗棠、萩、青花、萍、葉蘭、狂花、紫色の花、枯留り枝葉、
反り技葉、晒木、切滑、凋み易い花などであります。

婚禮の忌事

式の當日には少しでも氣に懸るやうな事や、忌むべき事などを言動に出さぬやうに
注意せねばなりません。婚禮當日には忌み言葉が十八あります。即ち

かへす。わかれる。きる。もどす。のく。さる。さめる。うすい。さらひ。むえん
しりぞく。あさい。はなれる。あく。いとま。ひまどる。おくれる。さらふ。
等で、この外に尙ほ慎むべきものに、

往す。厭ふ。四。死ぬ。煩ふ。病氣。袋。褪める。遣る。變る。短い。續かぬ。繫
がらぬ。着かぬ。間。筭。悪縁。

等があります。また當夜の衣服にはむらさき、縞、うのめかへし、無紋などを忌み、

男子はもじり肩衣、かへしも、だちを取るものではありません。

婚禮の贈答品に就て

婚禮に就て祝物を贈るときには、その物が記念として長く保存の出来るものか、或
は慶びの心持の通るものを贈ります。例へば鮮魚、鯉節、鯛、花東、真綿、樽、鏡臺、
針箱、小袖類、帯その他身廻りの調度品或は呉服切手等、すべて本人に直接用ひられ
るものを選びます。

若し鮮魚を贈るとしますと、慶事ですから上品な魚とか、目出度い魚を用ひます。
鱒や秋刀魚、鰯のやうな下司の魚とされてゐるものは用ひません。若鯛を二尾贈ると
しますと、丁寧にするならば白木の臺に頭と頭をつき合せて、腹を内側に八字形にお
き、尾に尾をつけます。そして目録書を添へて持参します。略式には魚籠に木の葉を
敷いて、頭を交互に腹合せにおきます。この魚類の贈物には總て熨斗をつけません。

また花卉を贈る場合には、紅白のリボンを以て飾つた生花の花束、或は造花の花籠を贈るべきもので、花環は凶事に贈るものでありますから注意せねばなりません。

また反物などを贈る場合には大高か奉書を二枚重ねて包み、水引をかけます。すべてお祝ひ物を包む包紙は、大高、奉書、西の内、美濃紙などを用ひますが、包紙の数は大抵二枚づゝ重ねて用ひます。水引は紅白は紅が右、白が左、金銀は金が右、銀が左になるやうに結びます。

品物の上包には、中の品物の名を書き入れるのが本當ですが、現今一般に行はれてゐる方法は、たゞ「御祝」とか「壽」とか認め、例へば金子でも「御肴料」「御酒料」などとして、裏に金何圓と書いておく位が宜しい。表書は上の中央に、自分の名は下の左に書くのが本體であります。熨斗は上の右肩に添へます。

返禮には宴會を開いて客を招くのが正式であります。また赤飯や紅白の餅、略して菓子などを贈つても宜しいものであります。たゞ返禮の品々には鮮魚なり鯉節なり

鯛なりの生臭いものを添へるものであります。

家庭の人となつてから

良人に飽かれぬ要心

妻が良人から飽かれるには、いろいろ原因もありませうが、先づ普通最も多く見るところの原因は、妻が夫に對して何日も同じやうな調子でいつた場合に、どうも面白くない結果を來すやうであります。言ひ換へて見ますと、妻に少しも進歩のないこととです。單に家の掃除をし、食事の世話をすると云つた毎日判で捺したやうに何等變化のない。それ以外に能力のない妻は、夫にとつて無味乾燥な生活であり倦怠を感じしめます。夫婦生活は誰しも結婚當時のやうに珍らしく、愉快な感情は然ういつまでも續きませんけれど、その結婚をして失望に陥らしめる原因の多くは妻の無能にあるやうです。男子は常に知識的に新らしいものを慾求してゆくのが普通であります。

女は家庭に入ると、どうしてもそれが閑却され勝ちで平衡しなくなります。若しそれが向上心の無い妻でありましたら一層夫との間に隔りを生じて来て、妻の知識の範囲が狭いと、いつも同じ調子な爲めに、夫にとつては物足らない感じが起つて来ます。妻が夫から飽かれる理由はそこから出發して居るのが多く、夫にとつて物足らぬ妻にならぬやうに、常に自分の知識を取り入れるやうに心掛けることが、妻になつての第一の要素と云はねばなりません。

それから一つは愛の飽満といふことです。獨逸では離婚の發端は退屈からだといひますが、どんなに愛し合つた中でも、あくびをするやうになつてはもうお終ひです。一體夫婦といふものはお互ひに奥底まで知り合はぬうちが花でありまして、奥の奥まで見え透くやうになつては、興を失はせるものであります。愛情の濃厚なのは結構ではありませんが、餘りに自分を見せ過ぎることは、早くに愛情を冷却させることになりますから、この意味で愛情の小出しといふことが必要だと思ひます。それから夫婦だ

けの生活、暇な生活はどうしても飽満を免れません。夫婦が来る日も来る日も鼻を突き合はしてゐては、大底飽きが來ます。これを調和させるには妻が家庭の他に一つの仕事を持つて見るのも可いと思ひます。そして廣く世の中の事を知つて、男の人の感じる色々な事を自分も同時に感じ得る知識を持つやうに心掛けるとか、又一つの望みを二人で持つこと、たとへば家を建てるとか、貯蓄などの共同の望みをもつて、それを研究し合つて行くといふやうな風に、日常生活に變つた氣持を起させるやうに、妻は頭を働かしてゆくことも大切だと思ひます。それには何と云つても知識が豊富でなければ出來ないことですが、兎に角妻としては絶えざる努力を生活に注ぐ心掛けを忘れてはならないと思ひます。

この他の場合、たとへば所謂世間で云ふ良妻賢母式な何時も袴を着けてゐるやうな理智一方な妻も、良人にはあまり喜ばれないものであります。家政の切まはしも上手に、子供の躰方も實に嚴格で、たしかに良妻の型に倣つてゐても、それが餘りに常

識に凝りかたまり過ぎた妻の場合も考へもので、夫にとつては眞面目な相談にも對手になると同時に楽しい遊びにも對手になると云つた妻が最も理想的であらうと思ひます。家内と遊びに出るほど面白くないものはないと云ふことをよく男が言ひますが、それは家内の頭にあまり經濟觀念がこびり付いてゐて、良人が折角出たのだから飯でも喰つて歸らうといふと、そんな不經濟なことをせず、坊やのエプロンでも買った方が宜いといふやうな、いつもこの調子でやるので折角の興が冷めてしまふのであります。勿論經濟觀念の大切なことは言ふ迄ありませんが、一方に堅實にやると同時に、時としては男の誰れにもある遊戯気分にも即してゆけるやうな妻がよいと思ひます。敬服しても愛することの出来ない妻は、よくかうした良妻賢母の型の婦人に多いやうですが、夫婦生活は理智一方でも夫の心を窮屈にし家庭の和樂と云ふことが失はれてゆくやうであります。

もう一つはこれに反して、餘りに享樂的な經濟思想のない妻も、やがて夫から飽か

れてゆくと思はねばなりません。夫が働いても、自分達の將來を建設しやうといふ考へがなく、徒らに美衣美食を望み、飽くことを知らぬ虛榮心の強い妻は、ついに其の家庭を亡びさせるものであります。

學校出の娘は何故嫌はれるか

世間ではよく學校出のお嫁さんは權式が高いとか、生意氣で可けないとか言ひますが、これはあながち學校出だからと限つた譯のものでなく、矢張りその人の性質と家庭教育に依るものだと思ひます。たゞ上の學校でも出てゐると物事を理屈で片附ける嫌ひがあつて、昔風な姑などには氣に入らなくなるのであります。

一體學校を出て直ぐにお嫁にやるのは考へものであります。少くとも一年位は手許において、他の家庭に入つても耻かしくないだけの心得を仕込んでやるのが本當だと思ひます。學校を出たてのお嫁さんは、どうしても學生風と云つた氣質が残つてゐま

すので、すべてが書生風で謂ゆるザツク balan 過ぎるため、如何にも禮儀をわきまへのやうに見えたり、時には遠慮のないことが姑などを馬鹿にしたやうに思はれたりするのであります。厳格な家庭に育つた人は、かうした事はありませんが、たゞ學校だけは充分濟ませても、家庭の教育といふことに少しも注意しない娘さんには事實かうした人も多いと思ひます。

人に依つては此方で仕込むから、その儘で結構だなど、言つて、學校を出たての嫁さんを貰ふ方もありますが、これはどうも結果が宜しくないやうであります。何故と申しますと、貰つた方ではそれ程でないと思つてゐたのが、案外物を知らなさ過ぎたりして、いろ／＼な缺點を發見して失望する例が少くありません。

もう一つは兎角學校を出てゐるお嫁さんは、自分の思ひ通りに何事もしようとしません。斯しては良人や姑の氣質、又はその家の家風などを知つて、それに應じてゆくのが嫁の努めでありますが、それを何も彼も自分本位にしたがるために、圓滿を缺いて

しまひます。家政向きの事や、或は子供の育て方などでも、姑が長い間の經驗からかうした方が宜いと言つても、それでは理論に合つてゐませんと云つた工合に、自分の主張を通さうとする嫁があります。たとへ理屈に合はないことも、長上の人は相當の經驗をもつてゐるので、そこには一理があるのですから、自分は一步譲つて先を立て、あげると云つた考へがなくては折合つてゆかれません。何かと云へば理屈で片附けるために、家の嫁は學問を鼻にかけるなど言はれるやになります。

又兎角學校出のお嫁は我儘者であります。一例を申しますと、女學校出の妻君が、良人が日曜などに稀に家に居るのですから、ゆつくり好きな本でも讀みたいと思つても、妻君は毎日自分は留守ばかりさせられて居るのですから、日曜ぐらの遊びに連れて行つてもいゝでせうと言つて引張り出してしまふ。良人がそれを拒めば、自分だけは遊びに出てしまふのです。

それから又、女には誰れにも嫉妬といふことはありますが、これが學校出の者は隨

分露骨なものがあります。殊に今の人は却々伶俐で、單に推量とか想像で嫉妬のな
く、計画的とでも云ひませうか、良人が外で善からぬ行ひのあることを嗅ぎつけると
兎に角その證據を洗ひあげやうとする。たとへば金をつかつて私立探偵社に頼むとか
して、動かさない證據を握つておいて、ぐつと良人を締めつけて行きます。これ等は
到底も頭のない、ぼんくらな者には真似られないことで、却つて辛辣なものでありま
す。一體嫉妬の程があつて、かういふ妻の態度に出られると色氣がなさ過ぎます。
自然良人の方は、自分が悪い事をしてゐても、男の意地から却つて反撥して、そこに
面白くない結果が來ます。たとへ妻がこの場合勝利者になつても、結局それで出て行
くでもないもしましたら、變なものが出来上つて、亭主を凹ませはしたが、自分の
引ッ込みがつかなくなると云つたものですが、嫉妬もかうなつては、良人をよくさせ
ることは出来ません。矢張り夫を愛するならば、反抗的に仕向けずに何處までも真心
をもつて、良人の悪い方面を直させる妻でなければなりません。これらも兎角教養の

ない女の方がよいと見返へられる一つの原因であります。

可愛がられる嫁と頼母しく思はれる嫁

嫁として良人からも姑からも、可愛がられやうとするには、何よりも無邪氣な信實
をもつて盡すといふことが大切であります。偽りのない良心のまゝに態度言葉をもつ
て接したならば、誰れしもその嫁を憎む理由は見出せないと思ひます。

ノラ式にたゞ人形のやうに、何でも相手の望み次第に自分を仕向けるといふ事も、
可愛がられるといふ意味にはなるでせうが、然しそれは全く玩具に過ぎないもので、
個性といふものを忘れた場合にのみやり得るものです。愛される資格は、さうした技
巧的のものでなくて、その人の眞實、その人の純な天真爛漫な心でなければなりません。

一體在來の家庭教育では偽りをいつはりどと氣づかずに教へ過ぎたと思ひます。例へ

ば、その場合にそれが正しい事でありまして、そんな事を言つては可けないとか云ふやうにされて、知らず／＼に所謂方便の嘘言を教へて平氣で過して来たやうです。それが何時の間にか個性となつて、第二の天性をつくりあげ、厭な事でも正直にイエス、ノーと言ひ切つてしまふことがあります。その爲めに結婚しても良人や姑などに對して、斯うした氣持から、ほんとうの良心のまゝの無邪氣さで接することが出来ず、心にも無い事を言つたり、意志に反した事をしたりするため、後日になつて帳尻が合はなくなつて来る結果、ついに愛の破綻を招くことになるのが多いのであります。それで何よりも自分の天真を現はすことが、何時の場合にも肝腎で、それはつまり誰れも持つてゐる良心のまゝを考へ、行へば宜いのであります。ですから嫁となつても、無暗に遠慮をしてゐないで、例へば食物でも嫌ひなら嫌ひと卒直に言つてしまつた方がいゝと思ひます。それを嫌でも食べなければ可けないと云つた形式的な觀念から、姑の前では我慢して食べ後でそれを好まないことを知つた良人の口

から出たりして、姑が氣を悪くすると云つた例などありますが、つまり總てかうした些細な偽りから、取り返しつかない事が起つて來ますから、自分の本當の心の底を話した方が圓滿にも行きますし、自分も樂だと思ひます。その場その時の誤まかし主義から、偽りを偽りと思はずしてした事の爲めに、のつびきならぬ破目になつて、自ら繩をなひ自ら縛るやうになります。姑や良人が寛大な心を持つて、然うした嫁の欠點を、悪い芽をつみ、良い芽を育てるといふ風に、仕向けてくれれば不和は起りませんけれども、さうでない限り、いろ／＼な災禍を惹き起します。

よく夫婦や嫁姑との小説り合ひのやうなものは、お互の嘘言がつまり積つた結果で下らぬ偽り、正しくない事が遂に取り返しつかぬことに追ひ込まれてしまふのであります。要するに嫁は、自然にして何の技巧もなく樂々とやつてゆく心持をもつて、素直に良人や姑に當つていつたならば、自分も氣樂であるし、お互の間も面倒なことが惹起されずに済むと思ひます。所謂氣心の知れないやうな何か腹の底に藏してゐる

やうな態度は、最も可けないことで、さつぱりといはゆる腹の底を洗つてしまつたやうな氣持でやつてゆくやうにしたら、お互の隔てもなくなり、何か言つても氣にかけらる事ありません。

更らに頼母しく思はれる嫁になるのは、矢張り可愛がられるから出發しなければなりません。それでゐてお腹のしつかりした、何事かの大事な場合にも動じないと云つた、理非判断の優れた嫁は、頼母しがられるでありませう。それには相當の修養と經驗が必要でせうし、又それを積まねば出来ません。然しながら何うかすると、緊乎した嫁であつても、それが自ら支配するやうになつては駄目であつて、良人は良人、我は我で何處までも立て、その蔭になつて自分は働くと思つた嫁が一番頼母しい嫁として理想であらうと思ひます。

良人の機嫌を良くする工夫

良人の機嫌を損ねないやうにと氣づかう心は女のやさしい心持でありまして、妻として最も大切なことであります。然し、單に機嫌を損ねないやうにと思ふことは消極的なことで、それよりも寧ろどんなにしたら良人を喜ばせ、良人を満足させ、進んで良人の足りない處を補ひ、お互に完全な理想に近づいて行かれやうかと考へて修養を怠らないやうに心掛けることが必要なことであります。

良人を喜ばせる第一の事は、良人の心持を自分の心持となし得る程度に、充分良人を理解することだらうと思ひます。それには良人の性質、好き嫌ひは勿論、良人の仕事、又は良人の理想をよく知るやうに努めねばなりません。そして良人に後れないやうに努力が必要であります。昔のやうにたゞ朝から晩まで、臺所にばかり没頭してゐては、良人の心持どころか子供の云ふことも分らなくなりまして、主婦としては、家庭内の事を上手に處理すると同時に、自分の時間を見出して讀書するとか、人に接して種々新しい意見を聞くとかして智識を廣め、是非とも夫の總てを知つて理解する

だけの力をつけ、共に成長發達してゆくやうに心掛けねばなりません。更らに進んで理想を申せば、夫を理解するのに止まらず、又良人のよき相談相手となり得るやうに注意しなければならぬと思ひます。

良人が妻に何か相談する時、又は意見を求める時には、充分良人の相談相手となり得るやうに、又相當傾聴に價する意見も言へる位に平生から修養しておきたいものだと思ひます。

嫁入つてからの嫁の心掛くべき事は、この外まだ多々ある事ですが、まづこれ等の事を結婚前に修養しておけば、所謂申分のない嫁となり得るのであります。以上は永井次代氏、三宅花圃氏、宮田多賀子氏、長松菅子氏などの談話で主婦の友掲載の一節を抜萃したものであります。

縁談に關する傳説

「縁は異なるもの味なもの」と俚諺にもある通り、全く縁と云ふものは不思議なものであります。他人からは良縁と思はれるやうな縁談でも、結局は纏らないものもあれば顔さへ見ずに一緒になつたものが、末始終仲よく添ひ遂げるのがあります。縁談がまとまつた際、親類縁者の挨拶に、「此度は不思議な御縁で……」と言ふのも、尤もな話です。況して交通不便な時代に、不知火の筑紫の女が鬼の住むてふ東の國の男と結婚し——嘗て夢にも見ず、噂にも聞いたことのない男女が、偕老の契を結ぶなどといふことは、如何にしても人間の業とは思はれず、人間以上の神なり佛なりが、導き助けてくれるのであるといふ考へを起すのも當然であります。

古事記の中にある伊邪那岐命と伊邪那美命とが、天の御柱を行廻り逢つたといふ神事を、婚姻の例に引くことは、如何にも畏れ多いことではあります。兎に角遠い太古の時代から、婚姻を全く神佛の啓示と思ひ、夫婦の縁は、神が結ぶものと信じてをつたのは、明かなことであります。

出雲の大神が、縁結びの神様であることは誰でも知つてゐられるでありませうが、
どうして出雲の大神が、縁結びの神様となられたかを知つてゐる人は少いやうであり
ます。これを先づお話いたします。

昔から男女の縁は、神様が結ぶのであるといふ考へから、種々の傳説が起り、それ
が因となつて、年々の十月には國中の産土の神々が出雲の大神に集ひ給ひて、自分の
管轄下にある未婚の男女を、出雲の大神の前に披露し、神々が評議してその縁を結ぶ
といふ、神話的の傳説が起つて、遂には出雲の神を結ぶの神といふやうになつたのだ
さうです。

その他、婚姻が神々の結ぶものであると信じられるやうになつた結果、各地方には
昔から種々の婚姻に關する神事や傳説や、迷信が行はれるやうになりました。
香取鹿島で知られてゐる茨城縣鹿島郡の鹿島神宮に於ては、昔から正月の十四日
に常陸帶の契といつて、男女の縁を卜定する神事がありました。これはその當日、

參詣の男女が布の帯に自分の名と、自分の想ふ人の名とを紙に記し、それを紙燃とし
たのを入れて、神前に供へ、參拜の後に東方の玉垣に向つて、その紙燃を左手の二本
指を以て廻して結ぶと、神意に叶ふものは、その二本の紙燃が結ばれるけれども、神
意に叶はないものは結べないので、それが結べると否によつて縁不縁を卜したもの
であります。

今までも、男女が寄り集つたときなどに、それらの名前を紙に書いて紙燃とし、
その端を結び合つて喜ぶ、「縁結び」といふ遊びごとがあります。それはこの常陸帶
の契の神事から起つたものであります。

山城國の大原の雜喉寢や、大和の十津川の雜喉寢のことは暫く措き、上方の或る地
方には、雜喉寢といふ縁結びの一つの風習がありました。これは村に雜喉寢堂といふ
堂があつて、毎年年越の夜になると、村中の未婚の男女が、この堂に行つて籠ります
これを雜喉寢といつて、その夜契つたものが、夫婦となるといふ風習でありました。

これは全く夫婦の縁が、結ぶの神の引合せであるといふ考へから行はれたものであり
ました。然し、この様な縁結びの風習によつては、どうもその結果が面白くありません
ので、その後この事はなくなりましたが、年越の夜この堂に籠ると、安産が出来る
と言はれるやうになり、女ばかりが籠る風習となつたさうであります。

また静岡在の丸子といふところには、小山の上に小野薬師といふのがありまして、
この薬師の、正月最初の縁日に、参詣の男女が、その坂道の曲り道で、双方から打
つかり逢ふと、それを縁があると云つて、夫婦になるといふ風習があると言はれて居
ります。

その他各地方により、それ／＼面白い風習や迷信がありますが、縁結びの神様とし
ては、多くは石像や木像の異體を神體として祀つてあつたものです。それは大抵生殖
器崇拜から起つたもので、徳川時代の中頃から明治初年にかけてはなかく、信心者が
多かつたものです。それが警察の取締が厳しいので、今ではその異體が姿を隠してし

まひました。殊に上州、日光附近から奥州地方には盛んに祀られてあつたもので、大
谷石の産地で名高い大谷附近には高さ二間にも餘る龐大なものさへ見られたといふこ
とであります。

縁切りの神様と迷信

縁結びの神様があり、従つて種々の風習がある一方には、また縁切りの神様があり
豊多の迷信が行はれてをります。

上野不忍池の辨才天や、江の島の辨天様、その他各地に祀られてある辨天様の前に
相思の男女とか、夫婦とか、揃つて参詣するか、或は社の前を婚禮のとき乗物を通す
と、戀人同志はその間がまぶくなり、夫婦ならその縁が裂かれるといふ迷信がありま
すが、これは辨才天といふ神が、獨身の神であり、人間が婚姻するのを妬むといふと
ころから、さういふ迷信が起つたのでありませう。

また小御嶽神社の前を、婚禮の乗物を通ると、その夫婦の仲がまぶくなるとして、こ

の神社の前を通るのを忌むのは、神代のときに大山祇命の姉娘の磐長姫が、天孫瓊々杵命に嫌はれ給ひ、妹の木花開耶姫が、皇妃となりしを恨まれたといふことにより、この磐長姫を祀つてある小御嶽神社の前を通ることを忌むのであります。

その他すべて獨身の神様は、縁切りの神様とされてをります。

各地方には、これ等の縁切りの神様が數多祀られてをり、また種々の迷信が行はれてをりますが、東京近邊では板橋の「縁切り榎」が昔から有名であり、この榎の皮を貫つて来て、そつと相手に飲ませれば、きつと縁が切れ、効顯いやちこであると言はれてをります。この榎は木曾街道の道傍にありますので、和宮様の御降嫁の際には木曾街道を下つて來られました。この榎の下を通ることを避けられて、榎のあるズツと手前から道を外れて、或る大名家敷内に道を取り、且つ榎の見えないやうにと、その大木を全部苞で包んでしまつたといふくらゐに、その時代には、その榎に威力があつたものであります。

この縁切り榎の由來は享保二年、富士山の北口を開かれた身録といふ行者が、富士淺間を信仰して、富士の北口を開くといふ心願を立て、この榎の下に三七二十一日の祈願を籠め、この木の下で妻子と別れたといふことで、そのとき身録は、自分等の如き善縁は決してその縁を絶えず、もろくの悪縁を絶つてくれるやうにと祈願を籠められたといふことであります。またこの境内には、獨身の神で、衆惡大罪を祓ひ盡す神である速佐須良姫を祀つてあつたので、いつしか「縁切り榎」と言はれるやうになつたのでありませうが、實は身録の心願したやうに、善縁は絶たず、悪縁を絶つといふので、妾との縁を切らせるとか、情夫との縁を切らせるとか、その他すべての悪縁を絶つといふのが本當で、夫婦などの善縁は決して絶つものではないと云ふのですが、今でもこの前を、婚禮の乗物を通すことを忌む人があるやうであります。この榎は既に千年餘も経つたさうで、枯れて樹幹のみが残り、中は空洞になつてをりますが、七五三繩を廻らした老木は、さすがに由緒あることを思はせます。

また新宿の先の淀橋は、昔から花嫁がこの橋を渡ると、縁が切れると云つて、こゝを渡らないといふ迷信がありました。これには種々の傳説がありますが、その一つによれば、應永年間に中野の或る長者の娘が、縁談のことから、この川へ身投げしたので、それより花嫁が此處を通ると、縁起が凶いと云つて、渡らなくなつたのださうですが、今から十餘年前に中野の豪家淺田といふ人が、この橋を架け替へて、同家の主人の花嫁さんが初めてこの橋を渡つてから、そんな風習もなくなつたやうであります。縁談に関する縁起と占ひ

一生一度の結婚です。その縁談が吉いのか凶いのか、箸一本倒れたのをも氣にするのは尤もであります。文明開化の西洋にも、縁談に関する種々な迷信が行はれてゐるのですから、これが東西を通じた人情なのでありませう。

よく四ツ葉のクローバを見付けると、思ひが叶ふと云はれ、若い娘さんなどは懸命に草を分けて探すものですが、なか／＼見つかりません。この四ツ葉のクローバは西

洋では秘密の望みが叶ふと云はれ、従つてこれを巧く見つけると、戀人との望みが叶ふとか、縁談が調ふとかいふのであります。またこの四ツ葉のクローバを、女がその靴につけると、早く愛人に逢へるなど、も云はれます。また電柱とその支柱との間を戀人同志が一緒に潜ると二人の縁が切れるとか、或は御飯を食べてゐるときに、娘さんがその座席を變へるやうなことをすると、必ず結婚してから離縁になるなど、云ふことが、町家の人達に言はれてゐます。

また昔から櫛を買つたり、拾つたりすることを忌んで、決してこれを買ふことをせず、五錢でも十錢でも先方にとつてもらつて、買ふやうな形式にしたり、また往來で見つけたとて、決してそれを拾はないのは、苦を買ふとか、苦を拾ふとか云つて、これを買つたり拾つたりすると、必ず縁が切れるといふのであります。こんな事から櫛屋さんでも、眞向から櫛屋とは言はずに、九と四で十三になりますから、十三屋と云ふやうな粹な屋號をつけてゐる店もあるくらいであります。

この櫛と同じやうに、貰つても必ずお錢を幾らか出して、買ふやうな形式をとるのが、西洋の縁起かつぎにもあるのです。それは、愛人からの贈物として、または約婚の印として、ネクタイピンやブローチ、ナイフ等の先の尖つたものを贈られたら、その儘貫はずに、幾らか出して買ふ形式で貰はないと、二人の縁が切れると云ふのであります。これは愛の表象が飾りに鋭すぎるので、愛を眞二つに絶ち切つてしまふといふ考へからです。従つて結婚の贈物として指環が一般に用ひられますのは、指環は圓くて終末がない、即ち限りない愛を示すからであります。然し、それに付けた寶石によつて、吉とも不吉ともなるもので、眞珠は涙の表象なので、婚約の贈物には不吉とされてゐます。一番よいのは輝きある愛と幸福、繁榮とを表象するダイヤモンドだそうです。また寶石の色も、非常に意味あるもので、グリーンの色は、仙女の色とされて、婚姻の日にこの色の寶石をつけると、仙女の妬を受けるといふので不吉とされて居ります。その他の色は何でも構ひませんが、殊にサファイヤかトルコ玉のやうな藍

色のものが、愛の表象として喜ばれてゐます。また寶石を贈るには、相手の生れ月を表象するのが、互に心が滲らないといふ意味を表すのださうであります。その他西洋には、燕が頭越しに飛ぶと、早く運のよい結婚をする吉兆だとか、男女が二人で歩いてゐるときに、黒猫か白馬に出會ふと幸福の吉兆だとか、娘が愛人のことを思つてゐるときに、鶏の鳴くのを聞くと、その人と幸福な結婚が出来るとか、愛を感じてゐる娘が、二階で偶然に轉ぶと、その年のうちに思ひが叶つて結婚するとか、また階段で、戀人同志が摺れ違ふか、或はキッスをすると破約になるので、一人が階段を下りるか上るかするまで、他の一人は必ず待つてゐねばならぬと言はれて居ります。また戀人同志が二人揃つて寫眞を撮ると、破約になるとか、二人が硝子戸を通つて三日月を見るか、或は二人が一緒に鏡に姿をうつすと、二人の間に誤解が起るなど、種々の事が言はれてをります。また縁談占ひには、こんなのがあります。林檎の皮を途切れぬやうに丹念に剥い

て、剃き終りましたら直にナイフを以て頭越しに後方へ投げやり、地面へ落ちる瞬間に、その林檎の皮の形がABC……のアルファベットの、どの字に見えるか、その見られたAなりBなりが、將來を契る良人の頭字であるといふのです。簡単な占ひ法ではありませんか。

また歐洲の或る地方では、村の娘さんのうち誰が一番早く結婚するかを占ふ法に、こんな面白いものがあります。それは納屋の床の上に、各自の指環をおいて、その上に指環の見えなくなるまで米を撒き散し、更に藁を少しかけておいて、合圖をすると同時に雄鶏を一羽放して米を啄ましめ、かくして一番早く指環の上の米が啄まれ、ほじくり出された。その指環の主が一番早く結婚すると云ふのであります。

また春夏秋冬に、それ／＼一番早く咲く花を見つけた日が、水曜日であれば、早く結婚が出来るといふやうな事も言はれて居ります。

こんな事もつまらないと言へばそれ切り、効果があると思つてやつてゐる人は眞剣

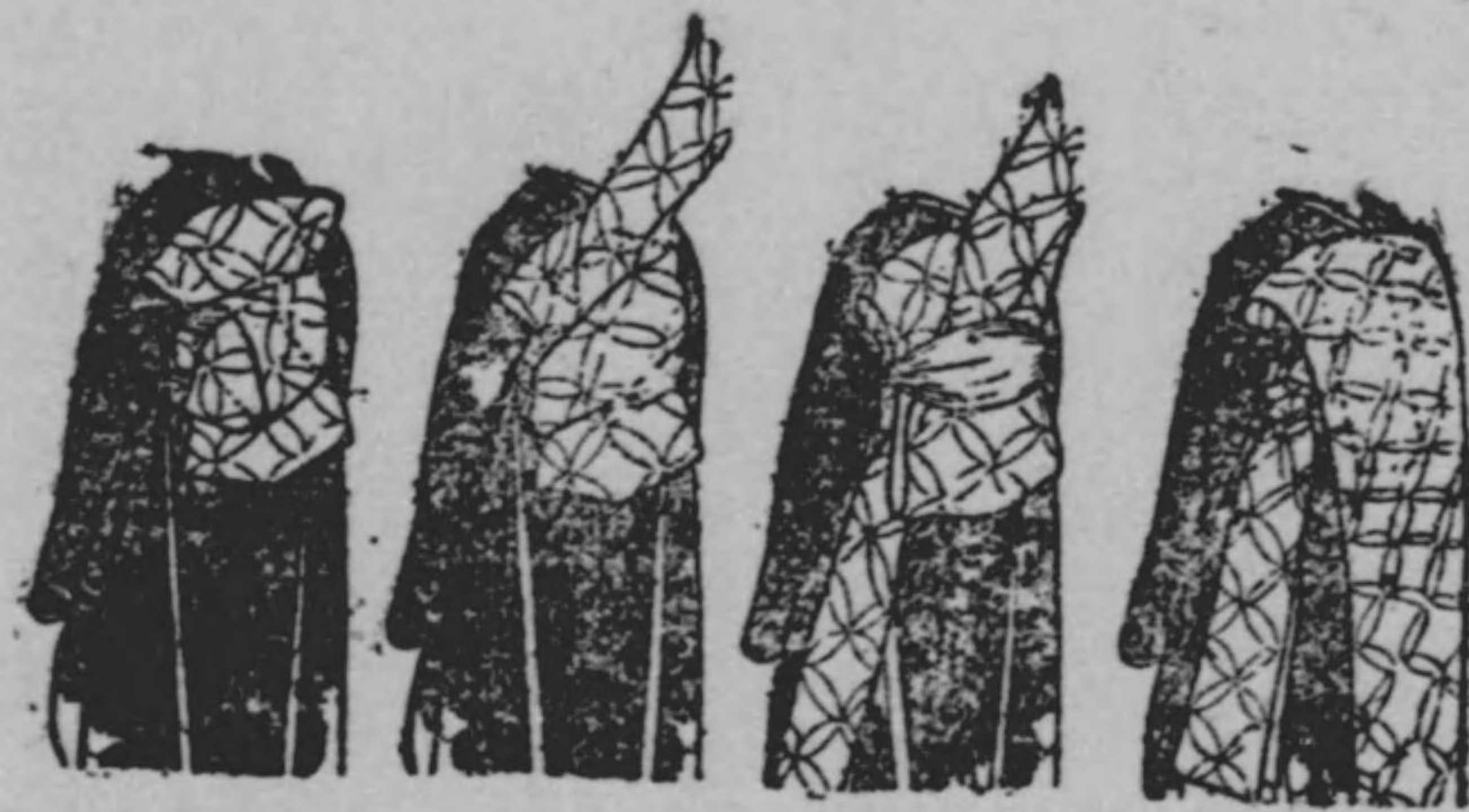
なんですから、一概には馬鹿には出来ぬものでありませう

帯の結び方

帯の結び方を述べる前に注意したいことは、裾模様のお召のおはし折の事で、が、肩揚のある年恰好のお嬢様の方は、裾模様がおはし折の下へ全部出てしまふ程の脊を持つて居られません。そこへ着物の丈が長いので、模様の頭をすつかりおはし折の中へ入れてしまつて、平氣でゐられる方が澤山あるやうですが、それは誠に心無い着つけであります。そんな時には、澤山のおはし折を全部下へさげてしまはないで、一つでも模様が出るやう、おはし折を上げて、伊達巻で押へるのであります。すると一寸のことで誠に合襖のところか床しくまゐります。又帯がすり落ちるやうでしたら後のおはし折の上、伊達巻の下へ脊負揚を入れると宜しうございます。

も一つ注意したい事は、晴れ着の帯でしたら、大抵織物ですが、それに若し鳥とか

樹木とか、花物など、すべて生物が織り出されてありましたら、それが逆さにならぬやうに注意して締める工夫をせねばなりません。すべて帯はどんな場合でも、模様を生かすといふ事を、第一の條件として考へねばなりません。



島田にうつる帯の結び方

最初手は普通のお太鼓より長目にして、二重廻し、垂れをズツと引き出して堅く締めます。次に垂れを下げて、お太鼓のやうに脊負揚をします。その時結び目のくしやくしたところは二三寸ぐらゐは犠牲にして、脊負揚の下へ入れ込むやうにし、上側になる方へ巾着襷を寄せ、高く脊負揚を脊負つて、堅く前で結びます。そしてワナになつてゐる方と手とでお太鼓のやうに結んでワナを左の肩へ、ズツと高く出し、手を右の肩の方へ引き出します。

引き出した手は、圖中にある點線のやうに擴げて、お太鼓の中へ入れますと、出来るのであります。すべて帯は脊負揚をしたときに、垂れた二枚がきちんと合ひませんと、見た眼が悪いばかりでなく、ちぎ崩れて来るものですから、脊負揚をする時注意して能く揃へるやうに致します。

令嬢向の結び方

最初手を普通の立矢の字くらゐにして、前にはセルロイドの帯心を入れ、二重廻してきゆつと結びます。そして圖中點線に示すやうな厚紙(幅二寸、長さ一尺二寸で板目紙か古いワイシャツのカフスが宜しいでせう)を心に挟み、垂れを上を持つて行つて脊負揚をします。若し大變長いやうでしたら立矢を二つ重ねてします。それから手を脊負揚の上から持つていつて、圖中點線で示すやうに、矢の字の裏側の方へ隠し

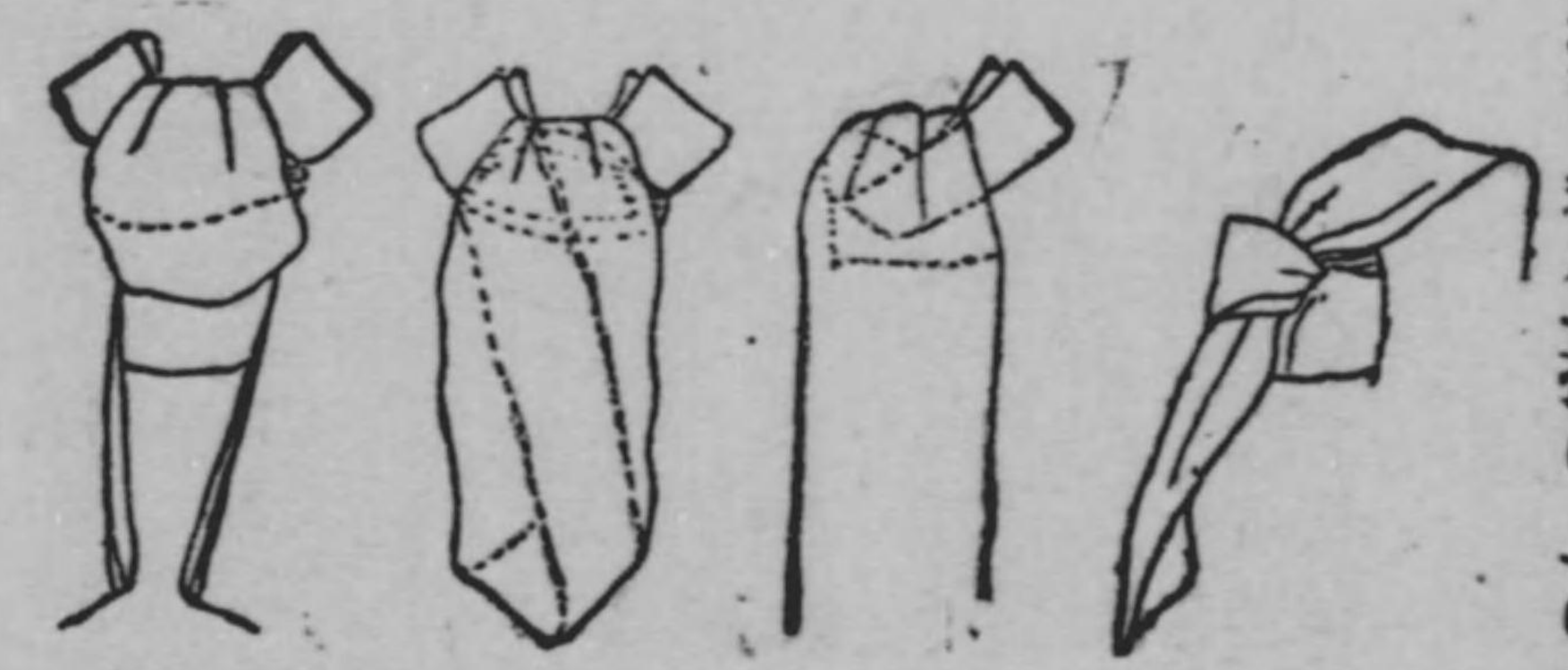


結び目の中へ押込んでおきます。又もう少し手の長いときは手の先を矢の字の左側へ
擴げて出しても宜しいです。

次に脊負揚の上の方へ出してあつた垂れを二つに折つて、その先を圖中點線で示す
やうに手の下に入れ込んでしまひますと出來上るのであります。

洋髪に似合ふ結び方

圖で示すA圖は、どの結び方にもある順序の一つです。垂れもすつかり引き出します。手は普通のお太鼓の長さで宜しい。B圖の點線で示すやうに、手を二つに折り、二枚になつた方を脊縫ひの方へ行くやうに、垂れの下から肩へ持つて行きます。C圖にある點線のやうに、矢張り垂れの先は二つに折つて、手の先と向き合ふやうに、二枚の方を脊縫ひの方へ

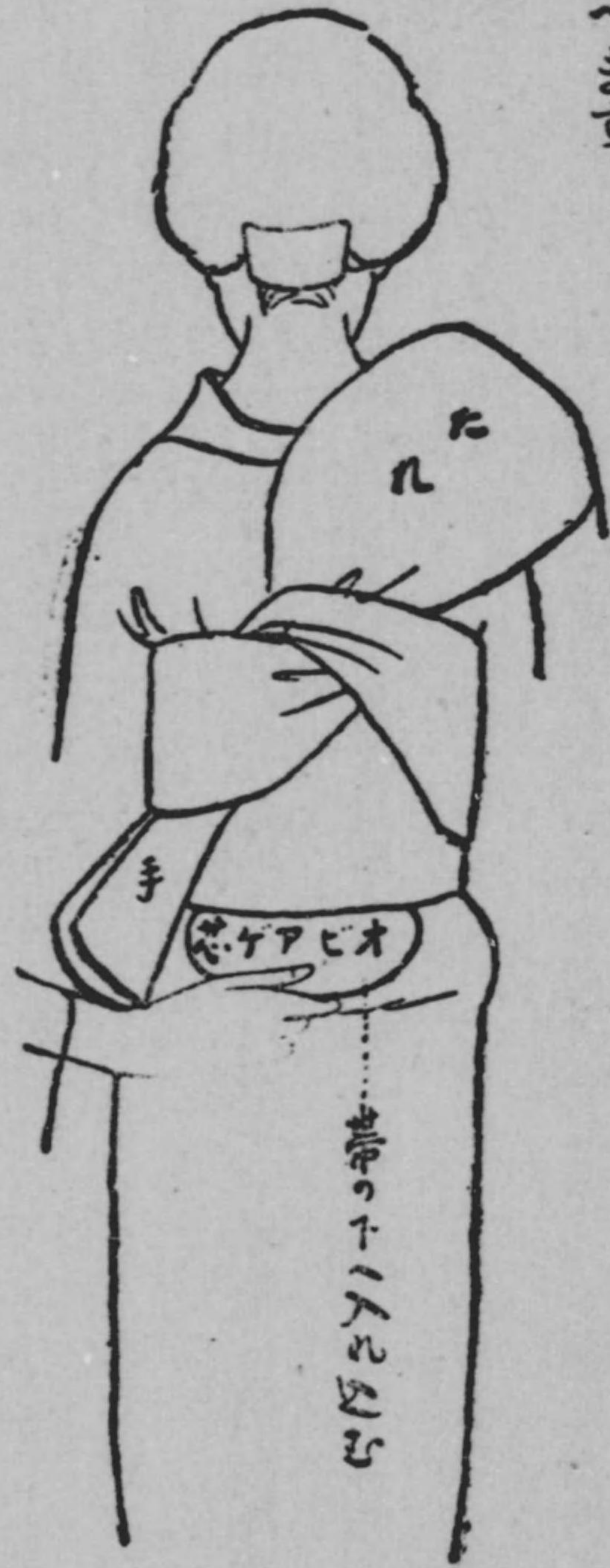


向けて、左の肩の方の持つてゆき、お太鼓の方には巾着襷を拵へ、脊負揚をします。かうしますと帯は、どうしても下で一つ捻れます。その捻れたところを、上の方へたくし上げていつて、お太鼓の中へ入れるやうにし、お太鼓の下に垂れになるところを二枚にして、D圖のやうに結びます。點線は中に折り疊まれたきれを示すものであります。斯うしますと先程上へたくし上げた捻れたところがお太鼓の中に入つて、丁度お太鼓のふくらみをつける役を受持つてくれます。これで全體の形を整へて帯留めをすれば宜いのであります。

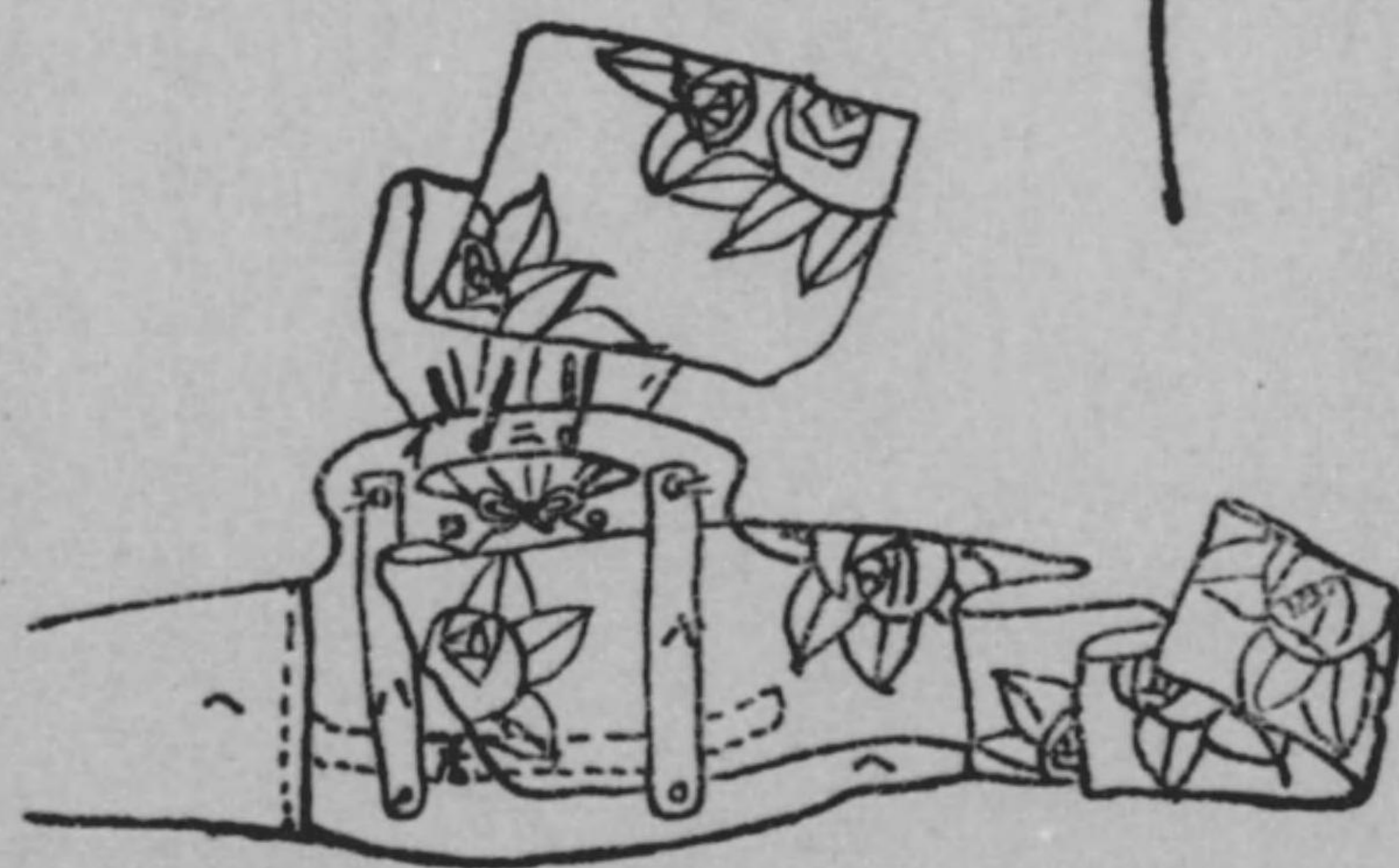
夏帯の結び方

肥つてゐられる方は、どうしても餘り細い帯や、派手に結んだ帯は似合ひませんから、斯ういふ方達は、矢張り名古屋や單衣帯などを用ゐられた方が宜しい。肥つてゐる方は、どうしてもおゝしきが目立ちますから、かうした單衣帯の薄手のものは、腰の所で帯の下へ極く小さい帯揚げ心か薄い腰蒲團を作つて挟んでおくと大變恰好よく結

入ります。



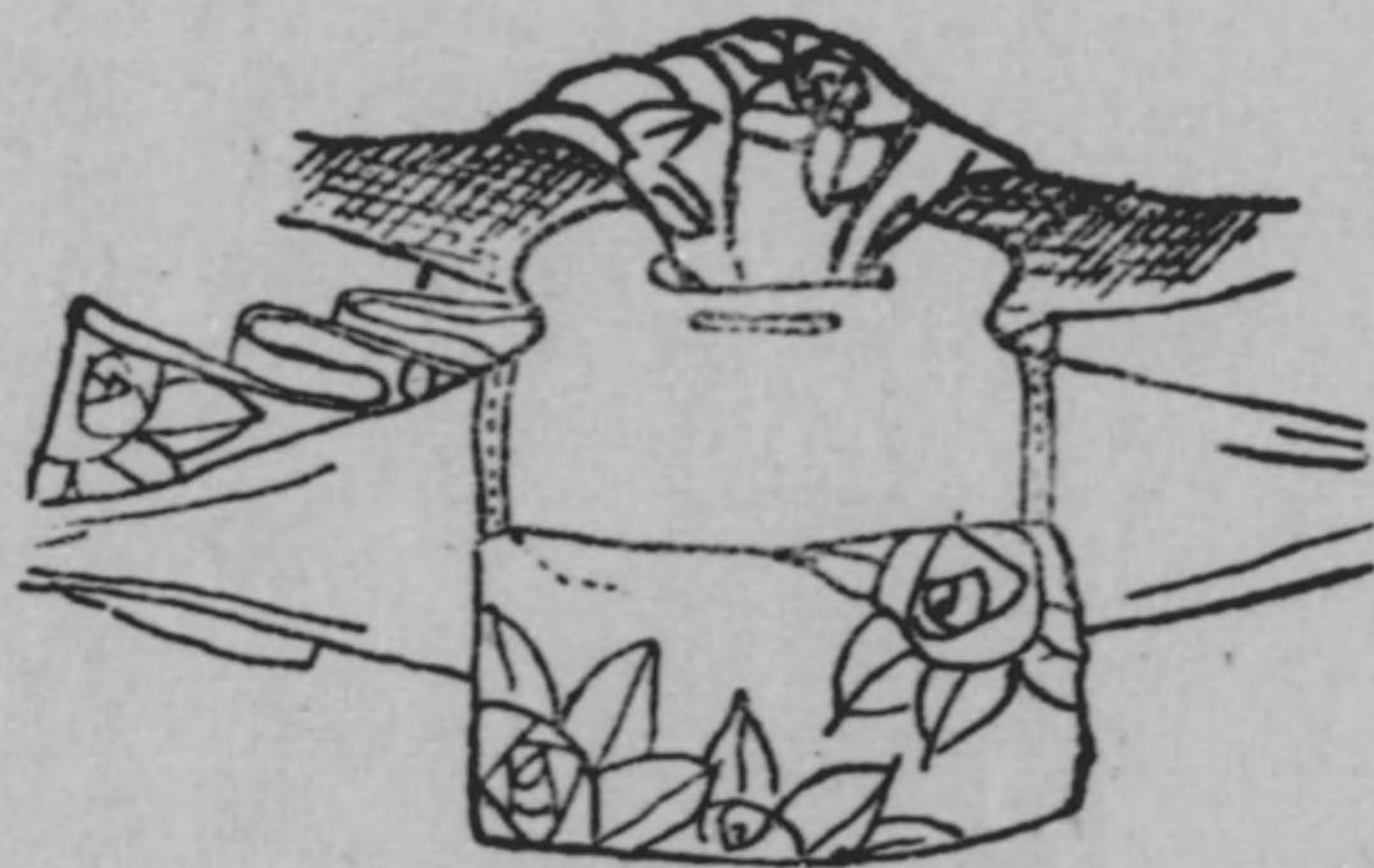
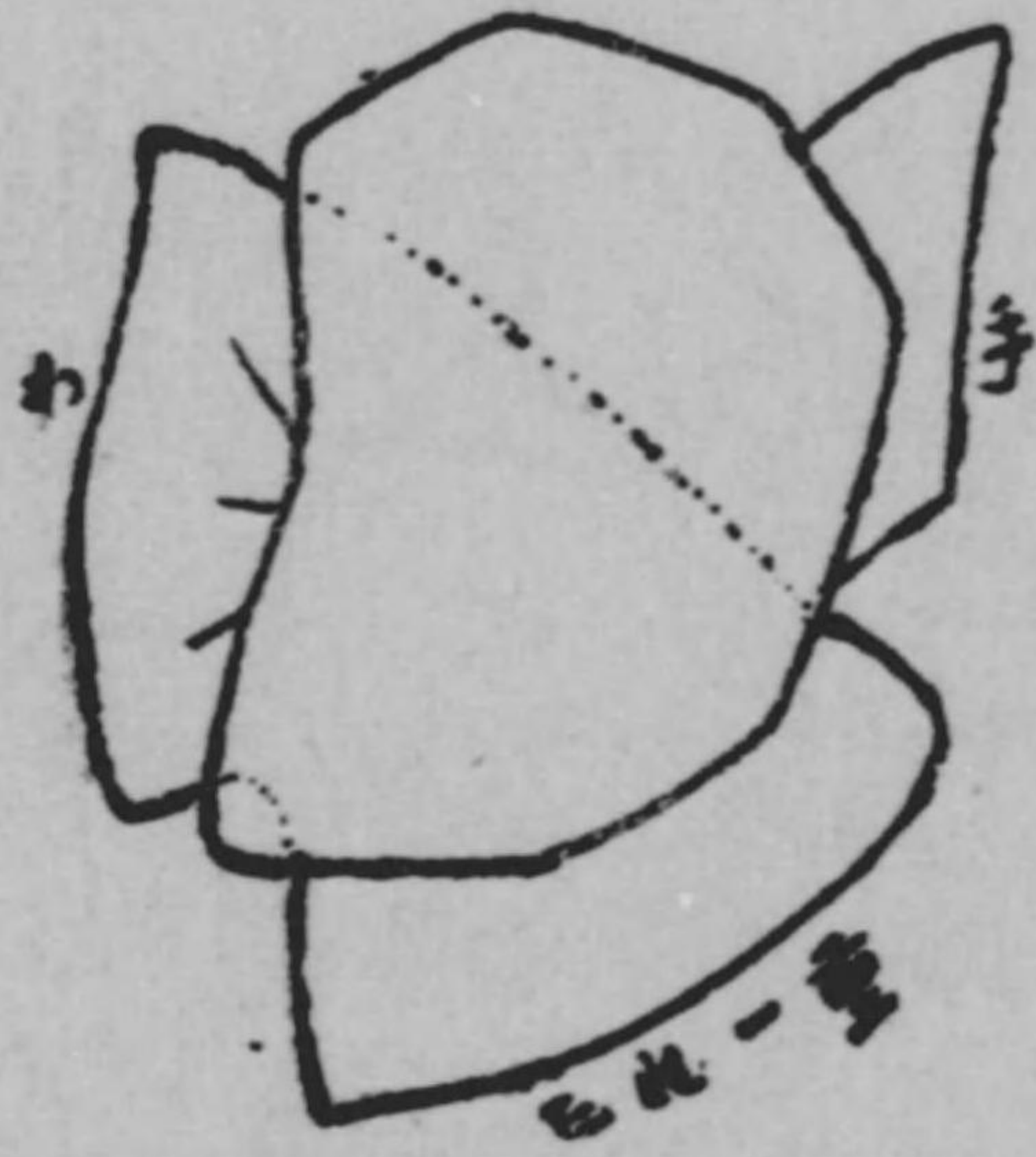
「小幡帯」はこれは誰れもがいつもするやうに後で垂れと手を結びます場合に垂れの方は、垂れ先を少し残して輪に引きぬきます。そこで手の結び目際を毎時のやうに少し胴へ巻いた部分の中へ押し込むやうにして皺を取りお太鼓のやうに垂れと手を結び合せて、両方の先をピン



と結び目の外へ引き出し、結び目の形をつけたところで垂の輪になつてゐる先に、一つ一寸襷をつけます（第四圖参照）と、隔が何となく広く見えますので恰好がよくて宜しい。

「名古屋帯」

名古屋帯は垂れにする方が普通の帯に比して大分短かい爲めに結び目を二重にすることが困難であります。その爲めにどうも腰



の邊りの形が悪くなりますから、お太鼓にする時は、垂れを残して、垂れを輪に引きぬきます。そしてこの輪の中心を通してお太鼓の形をつけますとズツと確平と氣持よく結

へます。併しこれは餘程恰好が地味になりますから、奥様向きとでも申しませうか。
 今嬢向のお太鼓、これは悉皆垂れを引き抜いて結びます。次に帯揚げ心をつけます



時に、帯幅の
 左右を二寸位
 ぶつちり
 中へ折り込
 で、帯揚げを

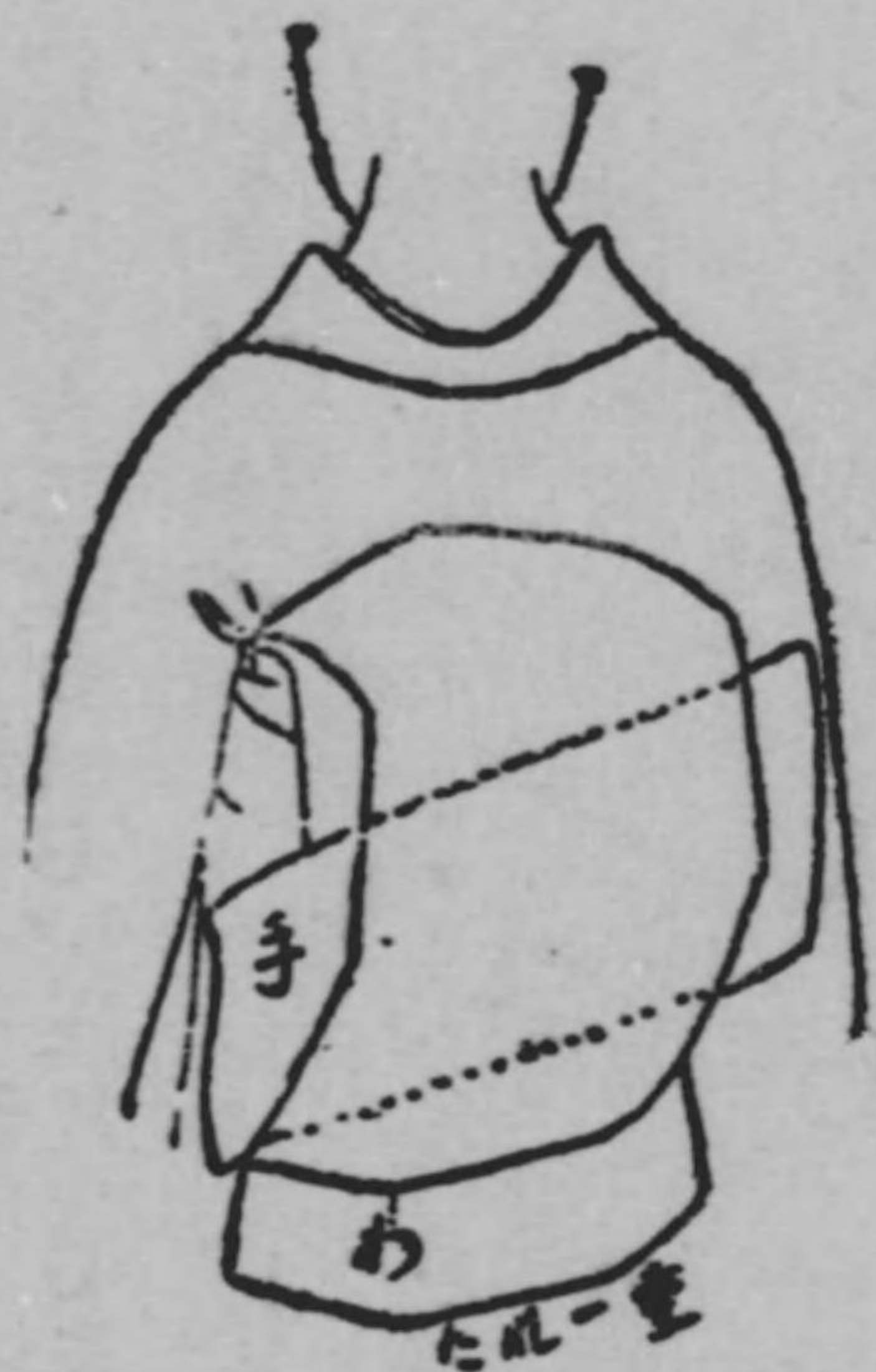
恰度よい高さに脊につけます。

後は普通のお太鼓に結び、下の方は帯幅一杯に擴げておきます。左右には派手に見せるために角を出しておきます。これは葉やかで厭味のない上品な結びあげが、堪らなく後姿を美しく見せます。

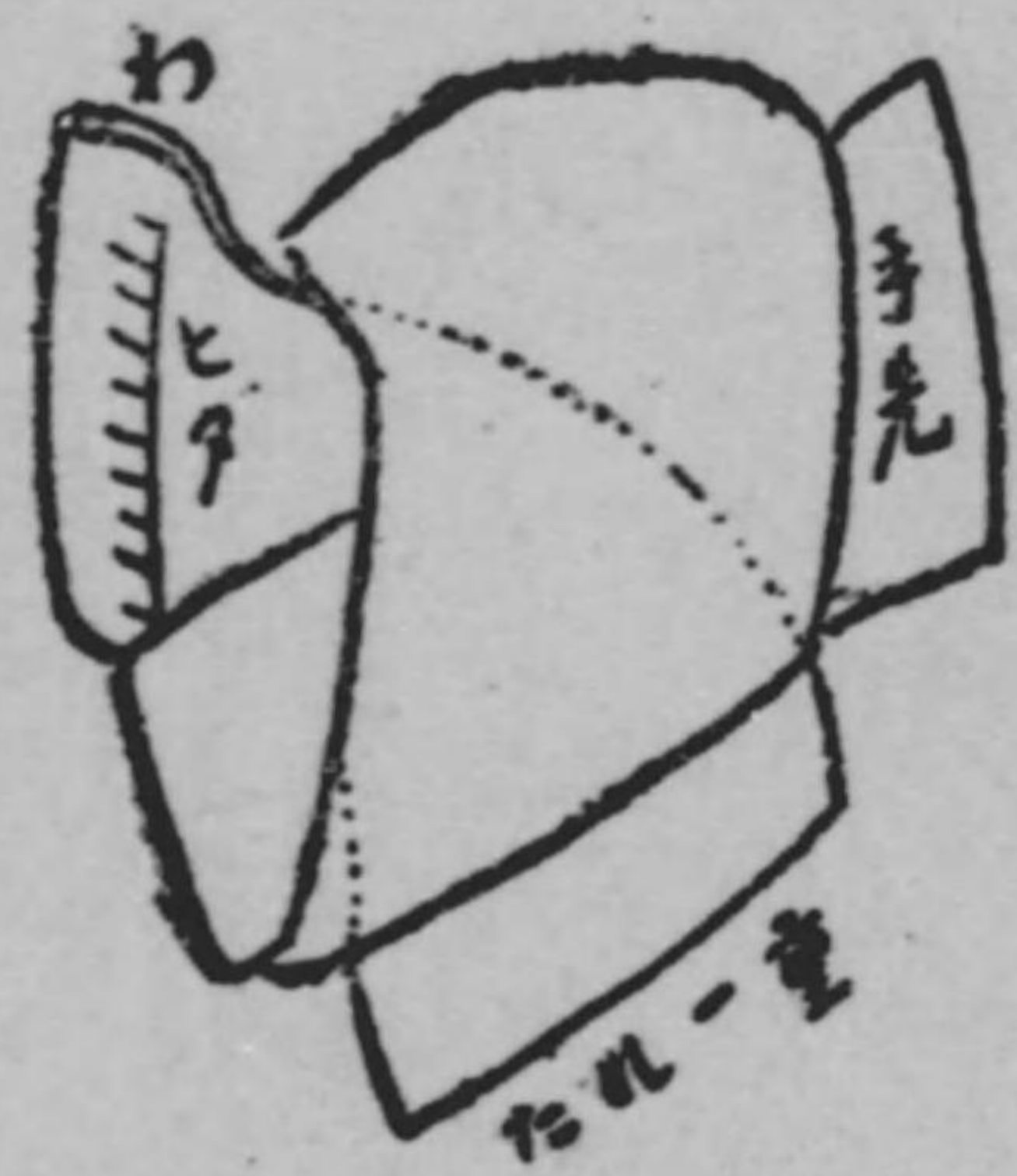
帯止めは、どの結び方にしましても正面は稍斜めにかけて、この結び目なり金物は斜

めの下つた方にして身體の正面より幾分横に見せた方が宜しい。高さは前の帯幅の半分より下になる位が頃合の形でせう。
 短い帯で結ぶお太鼓

これにはセルロイドで出来たお太鼓結びの帯形といふのを用います。この帯形を用いますと、帯の長さは従來の半分、つまり五尺乃至極く肥つた方で五尺五寸であれば充分好い恰好に結べます。



圖の如く網目になつてゐるところが即ち帯形です。又圖中の點線になつてゐるところは裏についた垂れで止め、(ハ)は前帯を動かぬやうに止めるニツケル板、(へ)は帯形を身體にびつたりと結び附ける紐です。
 これを使ひますには五尺の帯ならば、手とす
 る方を幅二つに折つて帯形の上部の孔へ裏側か

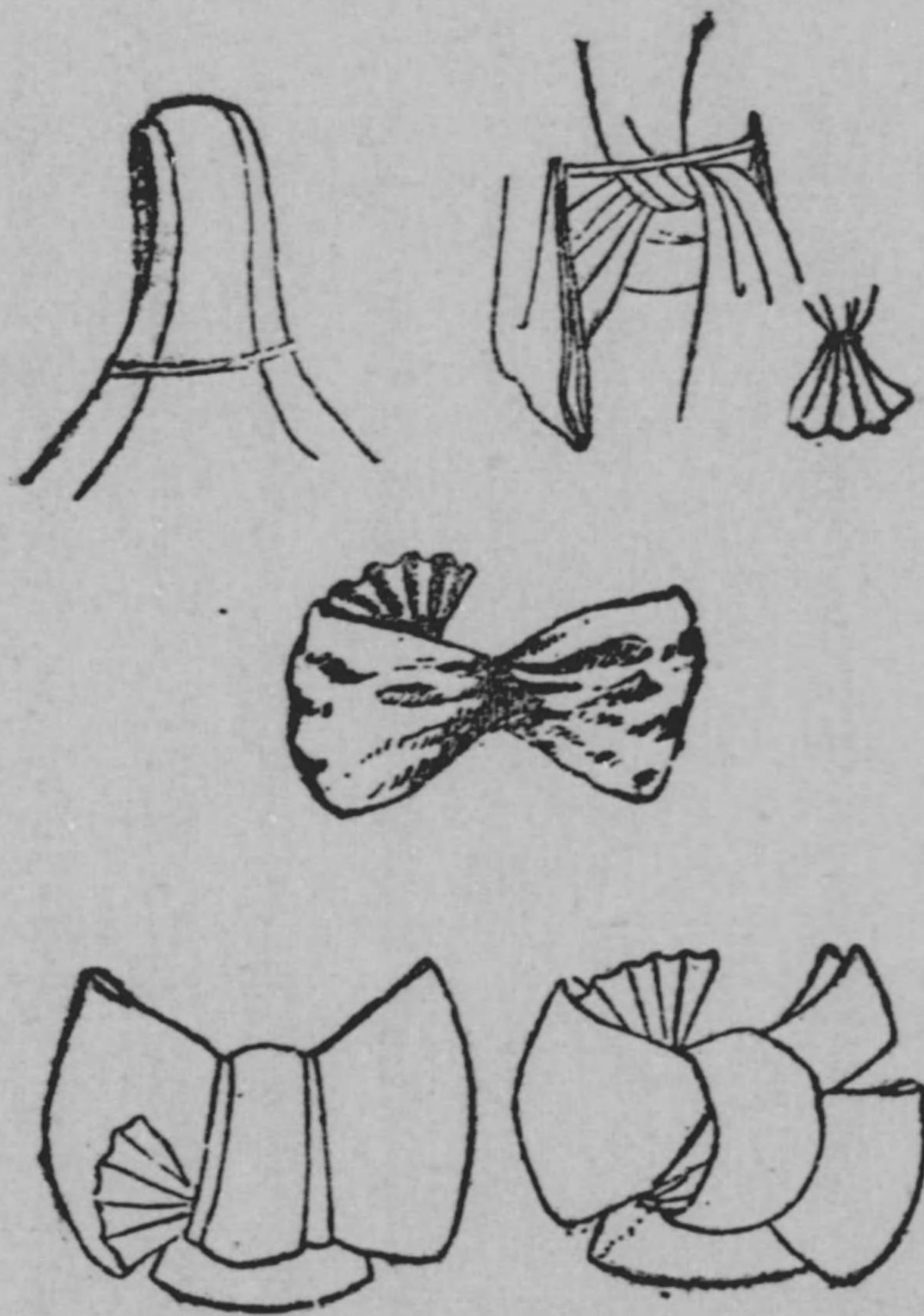


ら表へ通して抜き出し、三尺ほど手を引き出します。さうして紐でそこを堅く結んでしまひます。それから手の方を横に折り曲げて、ニツケル板で押へ（上のホックを廻して外します）次に紐のあるところへ揚げを當て紐で緊乎縛ります。そして普通のお太鼓を結ぶやうに、脊負揚で上の形を整へて裏返し、圖中の點線（裏側に、横に渡してあるセルロイドへ、垂れを挟み、よい恰好にお太鼓の形を拵へます。さうしたものを脊中に當てて（へ）の紐を前で結び、脊負揚も前で結びます。

次に三尺引き出した手を前に廻して（へ）の紐や、脊負揚を隠して、手の先を後のお太鼓の中にくゞらせますと、後から見たところ出来上り圖のやうで、少しも普通のお太鼓と變りがないばかりか、却つて身體の線にびつたり合つて、氣持がよく姿勢もしやんと致します。

八千代結び

最初手を二尺ばかりとりまして、二卷胴に巻きます。そして手を上にあげるやうにして、後で燃つておきます。それから掛けの先を輻五つに折り、細い紐か元結で先から五寸位入つたところ 結び、



先を末廣のやうに開き、この末廣を中に疊み込んで、中央を襷をよせて紐でくゞり、末廣を上へ引出して置きます。

それから手を二つ折りの儘下へさげて、下から上へとこれを三つ折りにしてお立てのくゞり目へわたし、末廣の下を通して

三つ折りの一番下の方になつてゐる部分に下から上へ引出して通して、ギユツと引き
緊めます。そして此掛けと三つ折りの間に脊負揚を通し、手のわたしてあります上部
のところを襷を作らずに山形にして、末廣の出でゐる方は全部上へあげ、紐を前に廻
し、一方の手の出でゐる方は、手を成るべく上になる様にして、手と三つ折との境に
負揚げ紐がわたるやうにします。帯止めは手の下の方に襷のないやうにキチンと幅を
して固く結びます。

彌生結び

これは普通に結び目にする方を二尺五寸ばかりとつて手にし、矢張り前と同様にし
て上へあげて置きましたら、この手を中央二三寸の幅にして、両端を合せて全體で丁
度帯の半幅くらゐにします。そしてこれを五寸くらゐの垂れにして、後を輪にし、お
太鼓に結ぶ時のやうにして燃つたところの上に紐で締め、垂れを開きます。(先圖参照)
掛けは先を前のやうに末廣にして三つに疊み、中央をくゞり、末廣を下へ出し、手

でこしらへた輪の中にこれを通し、両端を同じくらゐの寸法にして輪で中央をキユツ
と締め、三つ折の下側輪へ帯揚を通し、帯の最初の燃り目を帯揚げ臺として載せて固
く締め、帯止は輪の下の方へ入れて幅を擴げ、それと共に垂れの両端を少し上げ目に
して結びます。

両端は同じ蝶々のやうに上あがりになりますとキリツとして恰好のよいものでありま
す。

髪 の 結 ひ 方

髪かたちと云つて婦人の容姿の最も美しくも醜くも見えるのは髪かみの風ふうであります。況
して髪かみの風ふうの善悪よしあしで其人そのひとの品位ひんみも大概推はかられるものですから、或るべくおとなし
く結んで、常に亂さぬ様に心懸けねばなりません。

髪かみの結むすひかたぶりは、人によつて一概にどんな鬘まげが似合ふかは言ひ難いですが、先づ脊

が高くて瘦肉な人は、髪を鬘ともにも普通よりは少し大きく出し、鬘は成るだけ根を低くとり、高くならぬ様の結び方を宜しとします。これを反對に根を高く鬘の尻を高くすれば、愈よ脊高く瘦こけたのが目立つて容色を下げるものであります。又脊が低く肥つた人は、鬘とも餘り出さずして、鬘は成るべく高さが恰好が宜し。然うかと云つて餘り引詰め、鬘の出ないのは宜しくありません。

丸顔や平顔に鬘のない束髪などは、頬の脹れの目立つて宜しくありません。總て髪はどんな顔に限らず、餘り根の高過ぎるよりも低いのを宜しとします。それは何故かと云ひますと、鬘のふくらかで左右の耳の下に鬘裏の見えるのは貌のうつりの善いものであります。

前髪の取り様にも時々流行があつて、明治の初年頃には、額の正面は細く○のやうな分け方で、髪の薄い人は蚊蜻蛉の宿つて居るかと思ふやうなのがありました。其後追々に大きく上に擴がつて、冚のやうな形にとることが流行する様になりました。

これも又其貌によつて區別のあるのを知らず、流行と云へば誰れも彼れも皆真似るのは宜しくありません。これも人毎に異なるもので、面長の人は小鬘からかけて薄平たぐのやうな形にとつた方が面のうつりがよく、丸顔には少し細長にとり、ゆたかに高く立て、結へば、大いに容貌よく見えるものであります。凸額の人は前髪を十分前へ突出し、少しでも其の凸額の目立たぬ様にします。これと反對に、俗に猫額の人は成るべく後方へ引詰めて、額の廣く見える様に工夫します。

そして髪の結び方の種類はと申しますと、丸鬘、唐人まげ、割からこ、天神まげ、三つ輪、おさふね、櫛まき、達摩返し、島田崩し、おぼこ、おか本結、松葉返し、結わた、島田潰し、兵庫結び、堅兵庫、おしやこ、なげ島田、たかまげ（一名高島田）島田、下げ髪、片はづし等で、小娘の髪には蝶々鬘、銀杏返し、立唐人鬘、おたばこぼん、稚兒輪、かづらしたなどあります。

その中で丸鬘と島田鬘は、時につれ其の形状が少し變ることもありますが、廢れる

やうのことはなくて眞面目な結び方があります。妙齡の處女が結婚する時結ぶ髪は、この島田を用ゐます。

婦人の髪を結ふに用ふる諸器械は、あら櫛、中ぐし、すきぐし、けすじ棒、黒元結、白元結、すき油、びん付油、かもじ、たぼさし、たぼどめ、鬘入れ、ばらみの、びんさし、びんみの、はりがみ、鉈、剃刀、けぬき等であります。

◆島田まげ

島田鬘を結ふには、先づ鉈で元結を切り、かもじを取つておき、次にあら櫛で左右の鬘の毛をとかし、次に鬘の毛を漸次にとかし、再び中櫛で左右の鬘及びたぼの毛を丁寧に梳きあげ、小布を微温湯にひたし、それで毛をもみ癖を直し、水油を滴して毛になすりつけ、又すき櫛で能く梳きあげた上は紙を製へます。

はり紙は紺土佐紙を程よき形に切つて、鬘附油を塗るのであります。次にかもじを用ふる者は先づこれをとかします。其時にはあら櫛、中櫛等で能く梳き、水油を附け

てとかすのであります。次に又鬘さしをとかし、そして毛すじ棒で前髪をかき分け、黒元結で結びます。前髪の幅は、各その人の思ひくですが、大抵は一寸ほどが宜しいでせう、又小前髪を掻き分け、前鬘の毛と共に結びつけます。これを結び終りましたら中櫛で兩鬘を程よく掻き上げ、假りに紙を引裂いて



て結んで置き、次にけしの毛と云つて眞中の毛をとかし、前にとかして置いたかもじを入れ、元結で結び、次にたぼの毛をとかし、前のたぼさしを入れ、白元結でけしの毛に結んでおき、兩鬘の紙の結びを解き、能く梳いて毛を揃へ、けしの毛に結びつけ、又前髪をとつてけしの毛に結びつけ、けしの所を根とするのであります。そして白元結二本を合せ、根を堅く結んでおき、根がけをかけ、根を握つて能くとかし毛をそろへ次に鬘の大小を見計ひ、毛すじ棒で毛を先から三つに折返し、工合を見て紙をつけ、再び折つて毛筋棒で鬘の上を掻き撫で能

く毛を揃へ、次にかりに根より元結をかけて鬘を結び、そして毛筋棒に鬘油をつけ、前の鬘と後の鬘を掻き、元結でかせをかけます。かせは元結を前の鬘から入れて根の後で結び、そして先に根を結んでおいた二本の元結で鬘を結び、前の假りの元結を切り捨て、毛筋棒で前後を掻き、毛筋を揃へてこれで出来上つたのであります。

● まるる 鬘

まるる鬘を結ふには、先づ鋏で元結を切り、兩鬘のたばとけしの毛をとかすことは島田と同様であります。前髪を結つた後けしの毛を結びて根をこしらへて置き、次にたばさしを入れてたばを拵へ、根を結びつけ、次に兩鬘をとかし、程よく根に結びつけ、根を握つて能く梳いた後、元結で毛の中ほどを結びその結つた所から毛先を二つに分けて手柄を附けます。手柄は布を巻いて作り、又は毛のみで作ることもあります。かくして元結で其の手柄の根の所を結んで置き、毛筋棒をもつて折り返し、鬘入れを入れ、中さしを刺し、前に假りに結んだ元結を根のうしろに廻して結びつけ、更に前か



ら元結をかけて根の後で結び、假りの元結を切捨て、毛筋棒で能く鬘を掻き、毛筋を通し、又前後を掻き撫で、光澤のある様に結ふのであります。

● 束 髪

近頃束髪には色々と考案されて嶄新なものがあります。これが束髪の便利といふのは、束ねることの容易なると、その保ちの長いと、鬘つけで頭の上を塞ぎ、毛穴の蒸發を止めることのない故、衛生に宜しいのと、後にたばを長く出しませんから、首を前の方へ屈めるの憂がないといふ點から流行して居ります。

● 春 向 の 髪

鬘を基調としないで、たゞ長いものが束ねられたと云ふ感じを出した髪の結び方―

一要は日本髪でも洋髪でも、ふわりと結ばれたものでなくては春向きにはなりません。髪の形は顔の側面を鏡に寫して見て、顎の先から耳に線を引いたとして、その線の延長が、もう頭を通り過ぎやうといふところに来る一點、そこを鬘の最高の點とした髪形が宜しい。



この結び方は左右に耳隠しの毛をとります。そして兩耳に、ちよつと三本鬘をかけて毛をふくらませて置き、前も生え際に一寸鬘をかけて額の輪廓をとり、全部の毛を一纏めにして下の方で結びます。その上でまた耳隠しの毛なり、前髪なりを顔にうつるやうに指先で毛を引張り出して形をつけます。鬘はたゞ周囲の毛に釣り合せて、残つた毛を束ねておきます。丁度昔の人がおぼこに結ぶときのやうに、左の手に毛を一巻して、残つた毛を根にぐるく巻き、左の手を抜いて、ピンで止めておくのみであります。すき毛は何處にも

入れません。

夏向の髪

これは唯顔に合せて小ぢんまりと結ぶのであります。形は極く無造作なのが宜しいが、併し無造作なだけでは髪もべしやんこで趣がありませんから、一旦髪全體に鍔で形なり、ふくらみなりを附けておいて、無造作に結び上げた感じが宜しいのであります。



この髪には矢張り分け方も何もありません。たゞ前の方を七三にして、兩方へ一寸おきぐらゐの波をこしらへ、それをよく櫛で梳かして、皆一時にくゝります。さうしておいて、生え際のところや耳のところは、手で自由に引張り出して形をつけます。そして少しふくらみを持たせたい所々にはすき毛を思ひの儘丸めて入れ込みます。次に鬘ですが、髪

をよく個いて二三度捻り、くるくると巻いて毛先は、たゞ根に巻き込みますだけです。

秋 向 の 髪

髪の分け方は、後を少なくし前を七三にします。そして後の毛は二つに割つて、繩



を撚るやうに、根になるところで毛をねぢり、ぐるくと堅く巻いてしまつてピンで止めます。

それから七三に分けた左右の毛にマーセルウエーヴのやうな波をつけます、そして両方の毛先を捻つて、最初繩に撚つた根の毛のところへ持つて行つてピンで止め、毛先は互ひ違ひにぐるく巻いてまたピンで止めておきます。耳の廻りにも前の方にも、すき毛の様な

ものは少しも入れませんし、逆毛もしません。この様にして軽い簡単な結び方をして、時折にブラツシで梳しますと、自然の好い光澤が出ます。

冬 向 の 髪



先づ初め圖の様に分けます。そして後は全部一束にして根を少し根上りに結びます。次に前髪を俯いて梳してこれに梳き毛を前髪の中に入れて根で止めます。すると前髪に入れた梳き毛が餘つて出ますから、根の下に重ね合せて、前髪の毛はかもしの毛に揃へてとかし、梳き毛をピンで止めます。梳き毛が髪の上に出てゐて可笑しうございませが、この上へ鬘を載せますから隠れますし、また鬘もふつくらと致します。



上圖は、根の上の前髪の結び目のところへ、巻を載せたものです。かもしは動かさないやうにピンで留め、根の毛と一緒に下の方へ梳して来て、生え下りのところで二つに分け一寸ピンで留め、毛先を上を持つて行つて、また



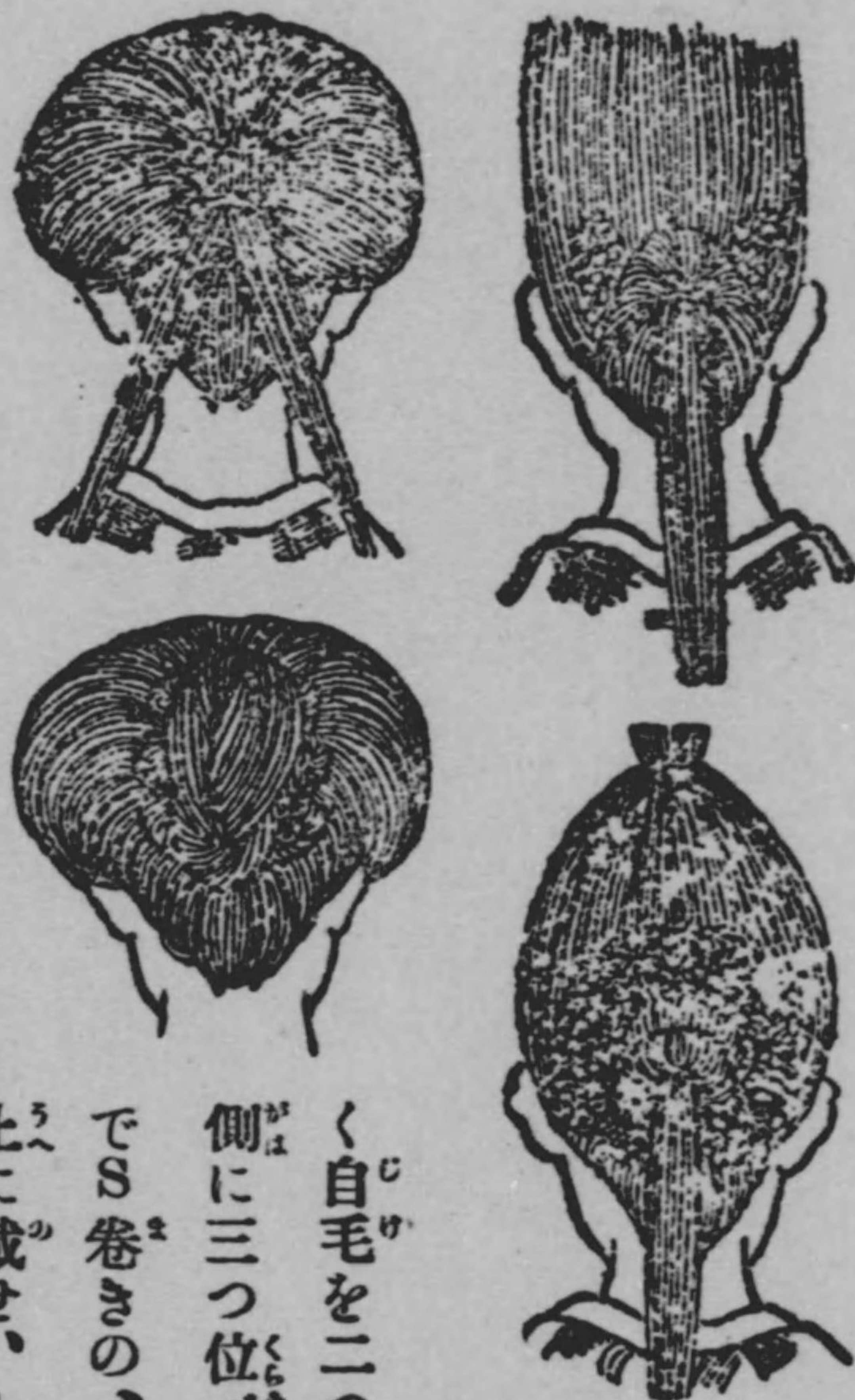
中から下の方へ返し、なほ毛が餘りましたら、毛先を振つて左右兩方へ小さなコブを拵へてところどころをピンで留めて置きます。若

し毛が短くて毛先が残りませんでしたら、コブは拵へないでおくか、上へ持つてゆく毛で少し大きなコブを拵へるかします。

最後に前髪を七三くらゐの見當に、横の方から一寸鑷をかけて、生え際の形をつけますと、どこから見ても可愛らしい束髪になります。

若奥様向

最初前の様な恰好に毛を分け、中根をとつて、これも根を少し高目に結びます。そして梳き毛を二つ作つておき、髷の毛を梳かしてその梳き毛の一つを圖の如くに入れて根に止めます、次に前髪を結んで、今一つの梳き毛を入れ耳の後あたりで、前と後



の梳き毛を程よく合せます。

この時梳き毛が餘り多いやうでしたら、兩方から撈り取つて程よくします。鬘は圖の如

く自毛を二つに分け、兩方とも振ちて、兩側に三つ位づゝ輪を作つてピンで止め、髷でS巻きの、先をくゞらした形を拵へて其上に載せ、ところゝくをピンで止めますと

出来上ります。誠に簡單で上品な若奥様向きの束髪であります。前髪には別に鑷を當てず、ふつくりとした儘にします。

髪 の 養 生

◆毛髪には常に日光と空気を與へねばなりません。

新鮮な空氣、日光は毛髪を美しくする上に大切な營養なのであります。日陰に育つた顔色に比し、清い空氣と太陽の恵みを受けた皮膚が艶かであるやうに、毛髪は皮膚の變形でありますから、充分この養ひを受けないと、美髪になりません。

◆毛髪には軽い刺戟を與へねばなりません。

人體の健康を保たせるには、相當の運動が必要であるが如く、丈夫な長い毛髪を育てるには、櫛やブラッシで梳いて、軽い刺戟を與へることが大切であります。

◆マツサージは毛髪を美しく豊富にする。

結髪の際には必ず頭の地肌を充分兩手の拇指、人差指、中指で軽く揉みます。マツサージの時に注意すべき事は、毛を引きつらないやうに、ピッタリと地肌に指頭を當て、揉み、それも一日五分間ぐらゐにします。

◆洗髪の前には油を地肌にたつぷりと塗り込んで洗ふと毛切れがせずに垢がとれます

日本髪は油を常に附けますから宜いですが、洋髪は平素油をさう用ゐません爲めに其儘洗髪しますと驚くほど毛がいたんでしまひますから、洗髪の前一日あたりから、

たつぷりと水油を地肌に塗りつけて、毛根に榮養を與へてから洗髪いたします。

◆雲脂の多い髪は毎日アルコールを盃一杯入れた熱湯で頭の地肌を拭くと宜しい。

雲脂が多いと其後が禿になつたり抜け毛がしたり、又結び上げに雲脂が浮いて決して奇麗に結び上げられません。かういふ方はマツサージをしたり、アルコールの混合液で頭を拭くと宜しい。

又レモン汁を絞り、これを薄めて梳き毛か脱脂綿に浸して頭の地肌を拭くのも宜しい。

◆就寝の時は僅かな手敷をおしきずに髪を解いてゆるく巻き毛根を休めておくと抜け毛が少なく毛がむれませぬ。

日本髪では到底望めぬ事ですが、人手を借らずに出来る洋髪ならば、就寝前に忘れ

ずにはぐして、先づブラツシで埃を取り、極くゆるく巻いて寝みますと、安眠もとれれば、髪かみの清潔せいじつを保つ事ことにもなつて抜け毛抜け毛を防ぐために効果こうかがあります。

◆髪油かみあぶらは礦物性くわつぶつせいのものは避け植物性しょくぶつせいのものを選べ。

髪油かみあぶらは如何なる場合ばあひでも、礦物性くわつぶつせいのものを用品もちひてはなりません。毛けを赤くし、癬毛せびけを生じ、汚よごれを早はやめます。植物性しょくぶつせいの最適さいてきのものは椿油つばきあぶらであることは、既に定評ていひやうがあります。

◆洗髪あらかみの時に毛先けさきを持つて洗ふのは切毛きりけの原因げんいんを作る。

多くの方が毛先けさきに液えきをつけて之これをしめして洗あらひますが、この結果けつぐわは毛先けさきが洗あらひ過ぎになつて、遂つひには毛先けさきを次第しだいに切きらしてしまひます。

◆結髪けつぱつの時は必ず前まえの結び上げと分け目わけめをかへること。

常に同じ分け目わけめで髪かみを結むすひますと、その部分ぶぶんの毛根もうこんを傷いため、分け目わけめの筋すぢがだんく太おとくなつて禿はげになることがありますから、注意ちゅういしなければなりません。

◆毛髪もうまつの艶つやを増ます食物しょくぶつを選べ。

毛髪もうまつに艶つやなくバサ／＼として居ゐりますと、延ひいては顔色かほいろにまで拘かつて、美うつくしい肌はだの冴さえは隠かくされてしまひます。故ゆゑに海藻類かいそうるい、牛乳ぎゅうにゅう、胡麻ごまの類るいの食物しょくぶつは是非必要ぜひひつたふであります。これは外部ぐわいぶから油あぶらを塗りつけるのと同時に、内部ないぶから榮養えいようを興あへて髪かみの艶つやを増ます上に非常ひじやうに効果こうかがあります。

◆洗髪あらかみに水みづを使つかふと禿はげになる事ことがある、温湯おんたうを使へ。

夏季かきになると水みづで洗あらふ方がありますが、垢あかや油あぶらの溶解力ようかいりよくがない爲ためめに、髪洗かみあらひに無理むりをして而しかも充分じふぶんに清きよめられません。尙又なほまた洗あらつた後あとで地肌ちはだがほてり、毛根もうこんの組織そしきを損そひ易やすく、これが爲ためめに禿はげになることさへあります。

◆癬毛せびけを治なほすには桑くわの根ねの煎汁せんじゆを用もちゐると不思議ふしぎになほる。

桑くわは少し大おほきい藥種屋やくしゆやにあります。これの煎汁せんじゆにタオルを浸しして、毛けの上うへにあて、蒸ひすやうにします。

結婚披露の挨拶（文例）

結婚の披露仕方は前に述べましたが、披露の挨拶を述べて見ませう。

結婚披露の挨拶（父より）

皆様、今日は御多用にも拘らず、御遠路を揃つて御足労下さいまして眞に感謝の外はございません。

粗酒粗肴で、到底も御口には合はない事と存じますが、どうか御寛ぎの上悠々と召上つて下さる様お願いいたします。

今度恩息好夫奴が、皆様の御引立てでやうく某会社に勤め、私達老夫婦も殊の外よろこんで居りました處が、知人が、

「君達夫妻も既に初老の域を跨いだのだから、早く息子に嫁でも貰つて安心してはどうだ」と勧められ、ついそ其氣になつて居りました處、恰度幸ひに何某氏の媒介で、

某家の令嬢××子と婚約が整ひました様な次第でございます。

何卒今後私達夫婦と同様に、宜しくお願いいたします。甚だ口不調法で、到底も皆様の御厚意に添ふことは出来ませんが、その邊のところは幾重にも御諒察の程を只管御願ひいたします。

結婚披露の宴に招かれて（友人より）

令息好夫君が、本日華燭の典を擧げられるに就きまして、友人として不肖私までにも御招待を忝ふしました事は、深く感謝する次第であります。

聲君好夫君は此程慶大文科の御出身で、しかも級の首席でぶつ通した秀才であれば前途の光明は期して待つべき君であります。尙ほ某會社の信任も厚く、大勢の社友も君を模範として居るとの事でありませう。

嫁君も、去る四月女子大學校御出身の才媛で、立派な淑女であらせらるゝ由、此上もない御良縁と存じ、誠意を捧げて御悦び申上げる次第であります。

此夫にして此妻を擁され、以て琴瑟相和し、膠漆の如くなれば御家門の榮えは日々
に其光を増すこと必定と存じます。

最後に臨み、新郎新婦よ、この幸多き夕の婚禮を忘却せず、鴛鴦の契り睦まじく、
何日までもく榮え給はんことを祈ります。

一言以て今日の佳き日の御挨拶と致します。

同 (來賓總代より)

諸君。

この儀式は嚴肅であると同時に、又非常に愉快なるものであらねばなりません。

茲に同席の榮を賜つた花婿花嫁の君には、久しく苦樂を共にせられんが爲めに、今
日の吉日を卜されて、偕老の契を結ばれたのであります。

希くば諸君よ、御兩人の前途ますます光榮と幸福にして、千歳の壽を得られんこ
とを御祈り下さい。

そして何某君と新夫人の健康と幸福のため満をひいて乾杯されんことを願ひします
諸君、同じ喜びを胸に抱ける諸君よ、吾々は永らく友人として御交際あらんことを
も併せてお祈りする次第であります。

聊か祝辭を述べて御挨拶にかへます。

披露宴の末席から(主人側の謝辭)

唯今は不肖私と愚妻のために、鄭重且つ懇篤なる御祝詞を忝けなう致しまして、
眞に感謝の外はございません。衷心より御禮申し上げます。

尙ほ又御懇篤なる御言葉に對しましても、一意専心、これに従ふやうに努力したい
覺悟でございます。

本日は切角御光來を賜りましたが、何の設備もなく實に心苦しい次第で御座います
が、どうか御ゆつくり充分に歡を盡されて、幾久しく御厚情を、來賓諸君一同に心か
らお願ひいたしますと同時に、又愚妻に代りまして、お願ひする次第でございます。

言葉が足りませんが、ほんの一言謝辭を述べます。

諸 届 書 式

養子縁組届

何府縣郡市區町村番地

戸主族稱職業

養父職業何

養母 何

生 年 月 日 某

生 年 月 日 某

何府縣郡市區町村番地

戸主平民某弟(又ハ貳、參男、女)職業

養子 何

生 年 月 日 誰

本籍 何府縣郡市區町村番地

右實父 何

右實母 何

誰 何

右養子縁組候間此段及御届候也

昭和 年 月 日

前記養子縁組ニ同意ヲ表ス

市(區、町、村)長……………殿

(證人ハ二人以上必要ニツキ之レニ做テテ列記スルコト)

證人 何 生 年 月 日 誰 印

(養父) 何 生 年 月 日 誰 印

(養母) 何 生 年 月 日 誰 印

(養子) 何 生 年 月 日 誰 印

何府縣郡市區町村何番地戸主族稱職業

養子ノ戸主 何 生 年 月 日 某 印

養子ノ父母 (父又ハ母) 何 生 年 月 日 某 印

婚 姻 届

何府縣郡市區町村何番地

戸主族稱職業

夫 何 生 年 月 日 某

妻 何 生 年 月 日 某

右父職業何某長(貳)男
右母 たら

右婚姻候間(同意書ヲ別紙ニ作ル時ハ「婚姻同意書」相添ト記入スベシ)
此段及御届候也

昭和 年 月 日

届出人 夫 何 某
妻 たら 印

何府縣郡市區町村番地
戸主(又ハ戸主トノ續柄)族稱職業

証人 何 某
生 年 月 日 印

(證人ハ貳人以上必要ニツキ此例ニ倣フテ列記スベシ)

市(區、町、村)長……………殿

(男ハ滿三十年、女ハ滿二十五年前ニ在テハ保護者ノ同意ヲ要ス○同意書ハ別ニ作ルモ可ナル
モ婚姻届ニ奥書スル方簡便ナリ左ノ如シ)

前記婚姻ニ同意ス

夫 何某ノ父 何 某
印

入 夫 婚 姻 届

同 母 たら 生 年 月 日 印
妻 たらノ父 何 某 生 年 月 日 印
同 母 たら 生 年 月 日 印

何府縣郡市區町村番地

戸主族稱職業

妻 何 某ノ 生 年 月 日 印

何府縣郡市區町村番地

戸主族稱職業

右父 何 某 長女
生年月日
右母 た れ
生年月日

何府縣郡市區町村番地

戸主族稱職業

夫 何

生年月日 某

本籍 何府縣郡市區町村番地
職業

右父 何 某 何男
右母 た れ

右入夫婚姻候間此段及御届候也
昭和 年 月 日

(妻) 何 某 れ
(夫) 何 某 れ
① ①

何府縣何郡何町何丁目何番地

戸主族稱職業

証人 何

某 ①

(證人ハ二人以上必要ニ附キ他ハ之レニ做テテ列記ノコト)

市(區、町、村)長……………殿

右入夫婚姻ニ同意ス

妻たれノ戸主又ハ夫何某ノ戸主

何 某
生年月日 ①

轉 籍 届

何府縣何郡町村何番地

戸主族稱職業

何

生年月日 某

妻 九

生 年 月 日 九

(他ニ家族アラバ列記スベシ)

轉籍地 何府縣郡市區町村何番地

右轉籍候間別紙戸籍謄本相添へ此段及御届候也

昭和 年 月 日

右

何

某 印

市(區、町、村)長……………殿

分 家 届

何府縣何郡市區町村何番地

戸主族稱職業

本家ノ戸主

何

某

何府縣何郡町村何番地
分家ノ戸主トナルベキ者
何々弟(妹) 何

生 年 月 日 誰

何府縣何郡町村何番地

戸主族稱職業

右父 何 某

右母 九 某

何男(女)

分家ノ家族トナルベキ者何誰妻

九

生 年 月 日 九

何府縣郡町村何番地

右父 何 某

右母 九 某

何女

(分家ノ家族トナルベキ者他ニアラバ之レニ做テ列記ノコト)

分家所在地 何市何區何町何番地

右分家候間戸籍謄本相添へ此段及御届候也

昭和 年 月 日

右

何

誰

印

市(區、町、村)長……………殿

右分家ニ同意ス

何府縣何郡町村何番地

戸主

何

某

印

生 年 月 日

住所(居所)寄留届

寄留ノ時 昭和 年 月 日

「夫妻ノ一方ノミ寄留スル時ハ他ノ配偶者ノ名」

夫(又ハ妻)

何

某

(原寄留地)(寄留先ヨリ寄留スル時此項必要ナルモ然ラザル時ハ不要)

住所地 何府縣何郡市町村何番地

本籍 何府縣郡市區町村何番地

本籍ニ於ケル戸主又ハ戸主トノ續柄

華士族(平民ハ不要記)

世帯主又ハ世帯主トノ續柄、職業

氏

名

生 年 月 日

(寄留者、世帯主以下數名ナル時ハ本籍ニ於ケル戸主又ハ戸主トノ續柄、華士族、世帯主又ハ世帯主トノ續柄及ビ職業ヲ肩書シ氏名ト生年月日ヲ列記スル事)

右住所(居所)寄留及御届候也

昭和 年 月 日

届出人世帯主

何

某

印

承諾者(家主又ハ家屋管理人)

何

某

印

市(區、町、村)長……………殿

復 歸 届

寄留地 何市何町何丁目何番地
本籍地 何府縣郡市區町村何番地

戸主(又ハ戸主トノ續柄)

何

某

(復歸者數名アル時ハ戸主ノ續柄ヲ肩書シ列記スルコト)

右復歸及御届候也

昭和 年 月 日

右

何

某

市(區、町、村)長……………殿

退 去 届

退去ノ日 昭和 年 月 日
退去先 何市何町何番地(退去不明ノ時ハ不明ト記スコト)
住所(居所)寄留地 何市何町何丁目番地(誰方)
本籍 何府郡縣市區町村何番地

右退去及御届候也

退去者

何

某

昭和 年 月 日

届出人

何

某

市(區、町、村)長……………殿

印 鑑 届

本籍 何市何區何町何丁目何番地
住所 何縣何郡何町何々何番地寄留
戸主(又ハ戸主某何男女)

印

鑑 届

何

生 年 月 日 某

右及御届候也

昭和 年 月 日

届出人

何

某

印

(前記ノ通り記載シ且ツ調印セル附箋(幅曲尺一寸長サ同五寸)ヲ貼附シ差出スヲ要ス)

(地主又ハ家主若ハ差配人ノ連署ヲ要ス
○戸主ノ印鑑届濟ノ上ハ家族ノ印鑑届ニハ戸主ノ連署ノミニテ足ル)

市(區、町、村)長……………殿

委任狀

拙者儀何市何町何丁目何番地何誰ヲ以テ代理人トシ左
記權限ヲ委任ス

- 一 何々(委任事項ヲ記載スルコト)
- 一 (代理人ハ其都合ニ因リ復代理人ヲ選定スルコトヲ得)

右委任狀仍テ如件

昭和 年 月 日

何市何町何丁目何番地

何

某 印

以下餘白

洋和 結婚禮式の心得

昭和十四年九月二十日 印刷
昭和十四年九月三十日 發行

洋和 結婚禮式の心得

定價金壹圓五拾錢

家庭圖書刊行會編

東京市淺草區藏前三丁目九番地
發行者 荒 芳 治 郎

東京市淺草區淺草橋二丁目十三
印刷所 大英社印刷所

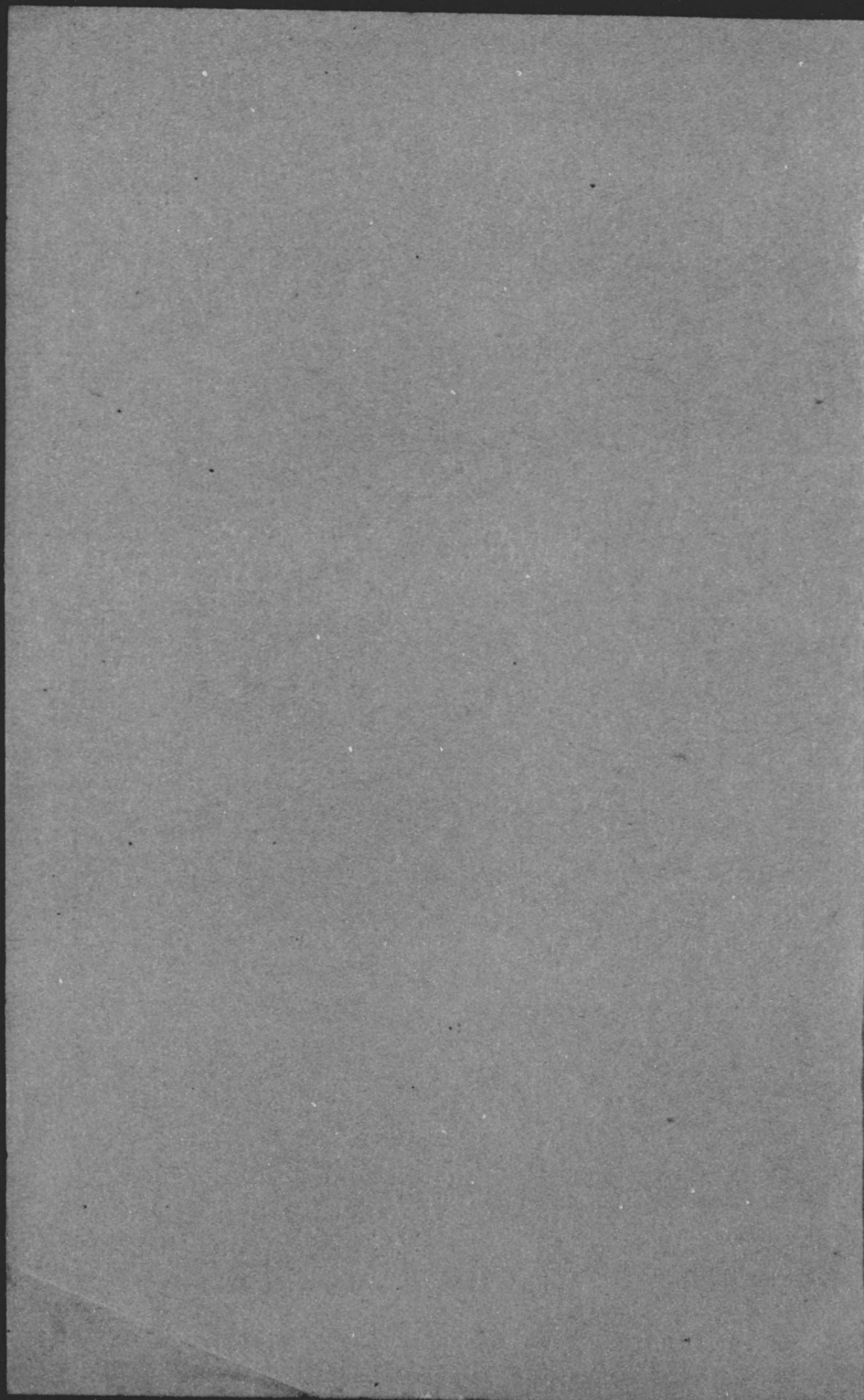
東京市淺草區藏前三丁目九番地

發行所

文江堂書店

電話淺草(四)二三七六番
播替東京九八八四番

不許
複製



396
161

